

秋田県沖合域の水温状況 (平成22年4月)

調査船千秋丸と第2千秋丸が4月6日から9日に行った水温観測結果についてお知らせします。

表層(3ページの図2)

水温は8.9~10.4 の範囲にあり、沖合では「やや高い」から「かなり高い」となっています。

水深50m層(3ページの図3)

水温は7.0~9.7 の範囲にあり、St.2~4、St.7、8が「やや高い」ほかは「平年並み」です。

水深100m層(4ページの図4)

水温は4.0~9.4 の範囲にあり、St.13が「やや低い」ほかは、「平年並み」か「やや高い」となっています。

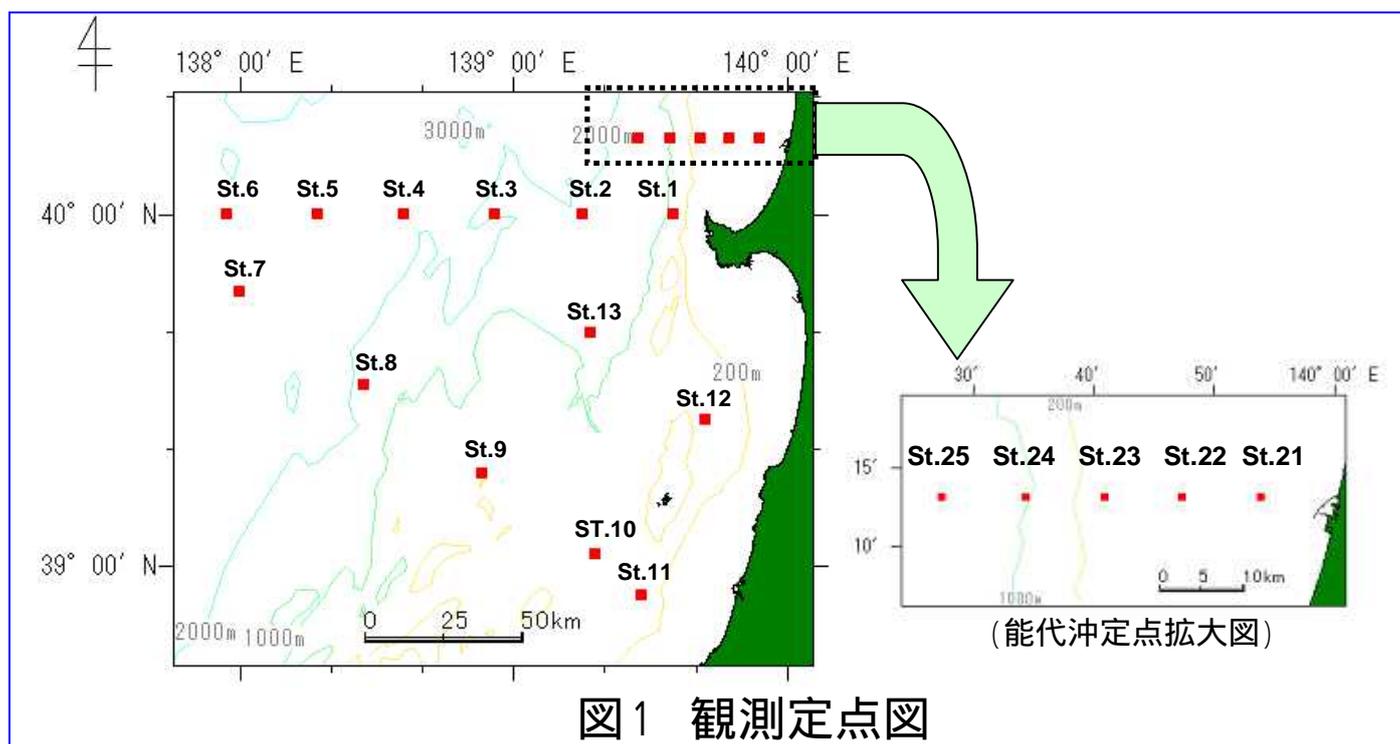
水深200m層(4ページの図5)

水温は1.6~7.9 の範囲にあり、St.3が「かなり高い」、St.13が「やや低い」で、他は「平年並み」か「やや高い」となっています。

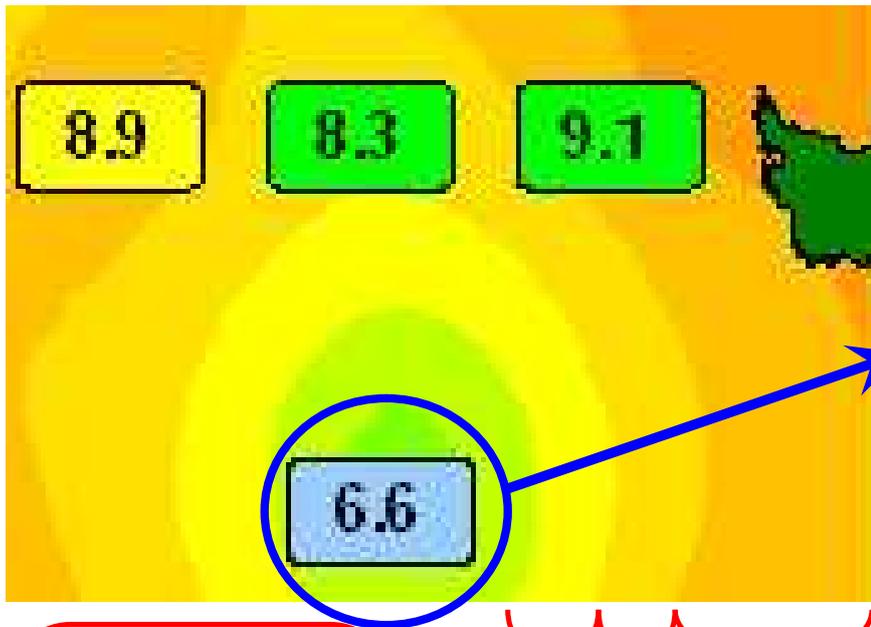
表層以外では沿岸付近は高め、沖合が低めの水温配置となっていますが、これは例年見られる傾向です。

また、St.13付近の水深100~200m層に冷水塊があり、ここだけは平年よりもやや低めの水温となっていますが、全体的には平年並みかやや高めの水温配置となっています。

今年の春は寒いと言われていますが、海水温は例年とそれほど変わらないようです。



図の見かた



数字は観測した水温 () を、枠内の色は偏差を表します。偏差を表す色の意味は、下の表を参照してください。(この場合、6.6 で、平年に比べてやや低いことを表します。)

注!!

ただし、どの色がどの水温帯を表すかは図によって違います(他の図でも黄色が8.0~8.5とは限りません)。

9~9.5 の水温帯を表します。

8.5~9.0 の水温帯を表します。

8.0~8.5 の水温帯を表します。

表 水温の評価方法(偏差の色の意味)

水温	はなはだ高い	偏差+201以上(20年以上に1回の出現確率)
	かなり高い	偏差+131~+200(約10年に1回の出現確率)
	やや高い	偏差+61~+130(約4年に1回の出現確率)
	平年並み	偏差±60以内(約2年に1回の出現確率)
	やや低い	偏差-61~-130(約4年に1回の出現確率)
	かなり低い	偏差-131~-200(約10年に1回の出現確率)
	はなはだ低い	偏差-201以下(20年以上に1回の出現確率)

$$\text{偏差} = (\text{今月の観測値} - \text{平年値}) / \text{標準偏差} \times 100$$

平年値とは、St.1~13が1971年から2000年まで、St.21~25が1978年から2000年までの平均値です。

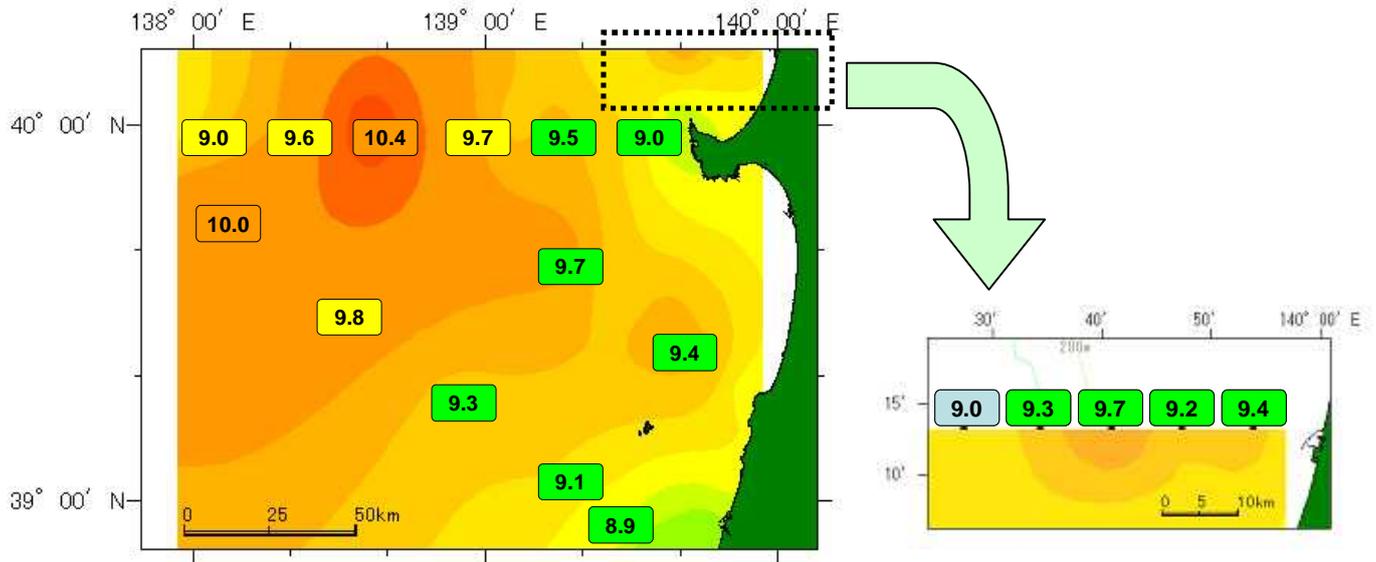


図2 表層の水温分布と定点別評価(偏差)

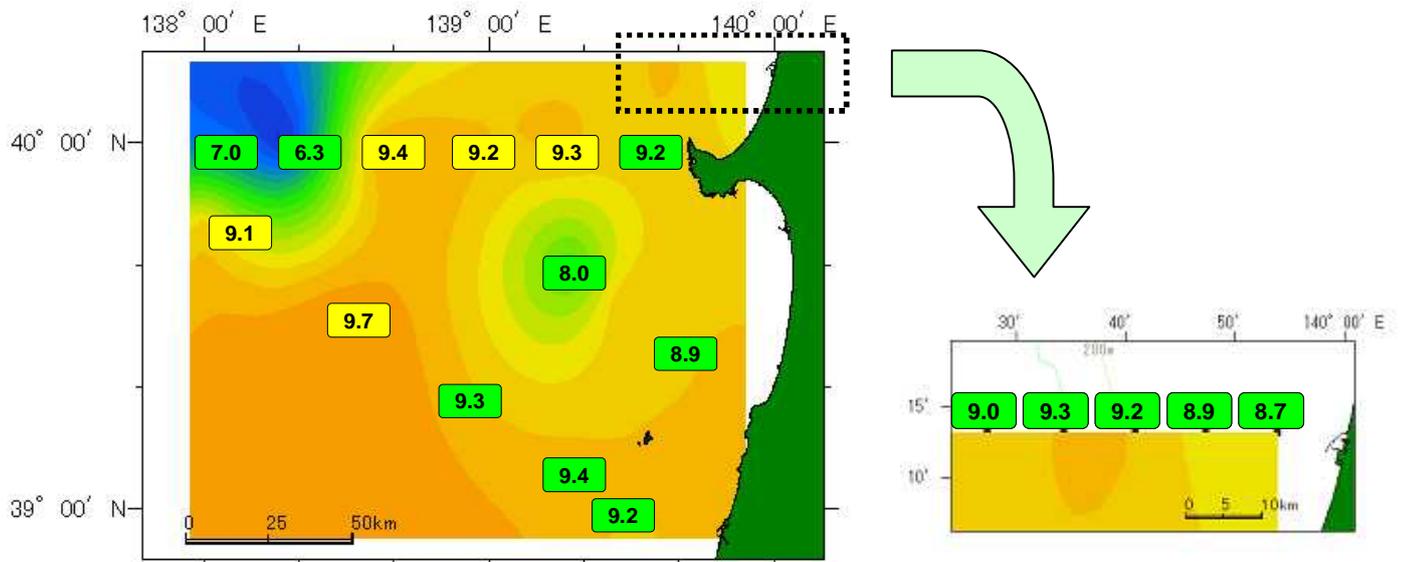


図3 50m層の水温分布と定点別評価(偏差)

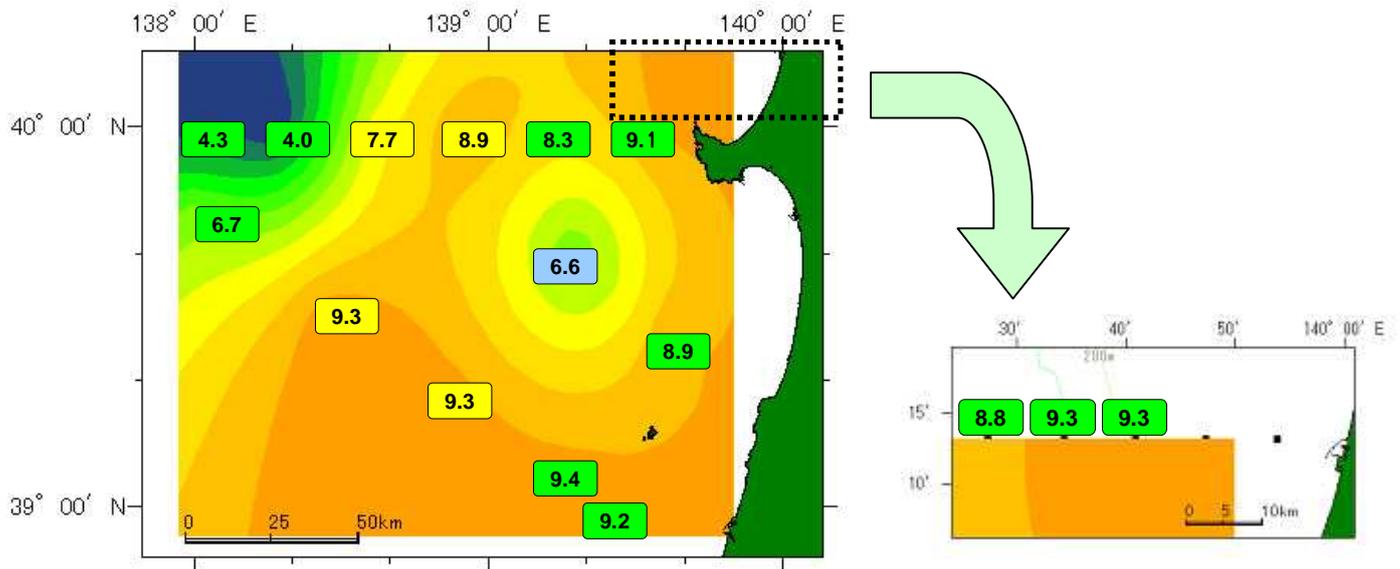


図4 100m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

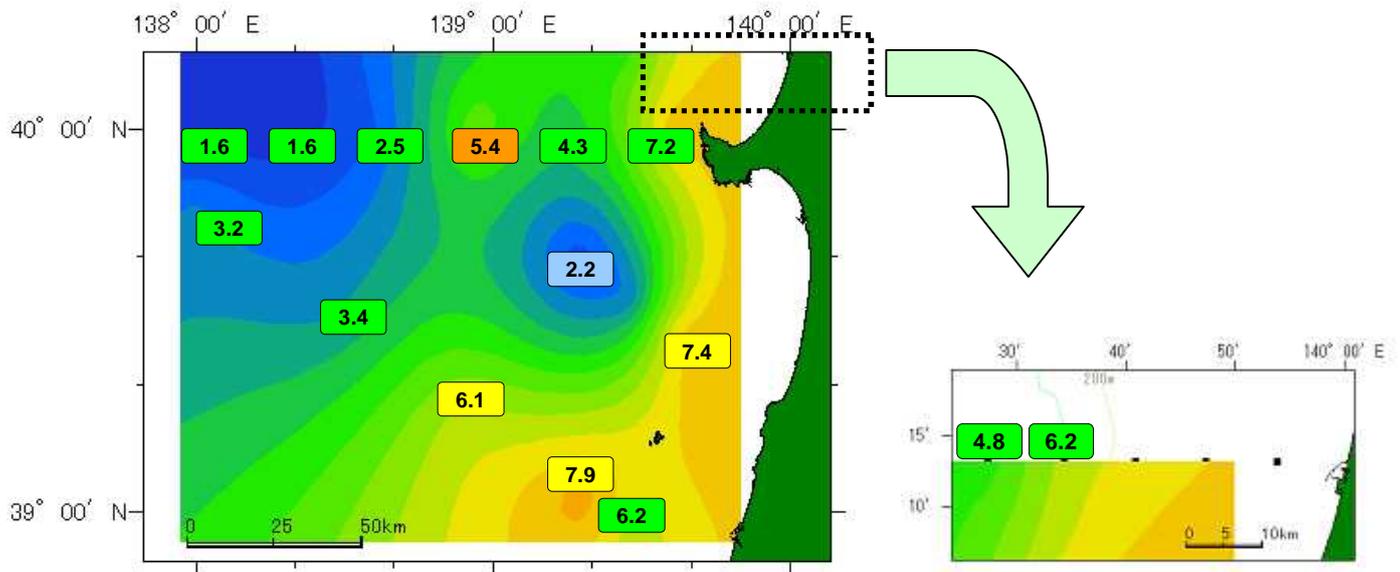


図5 200m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

秋田県沖合域の水溫状況 (平成22年5月)

調査船千秋丸と第2千秋丸が5月10日から17日に行った水溫観測結果についてお知らせします。

表層(3ページの図2)

水溫は10.3~14.5 の範囲にあり、4月に比べて平均で3 ほど上がりました。沿岸付近が高めで、沖合に行くほど低くなるという水溫分布となっています。

水深50m層(3ページの図3)

水溫は6.9~10.9 の範囲にあり、ほとんどの点が「平年並み」か「やや高い」で、やはり沿岸が高めの水溫分布です。

水深100m層(4ページの図4)

水溫は3.7~10.4 の範囲にあり、やはり沿岸が高めの水溫分布で、沖合の1点を除き「平年並み」以上です。

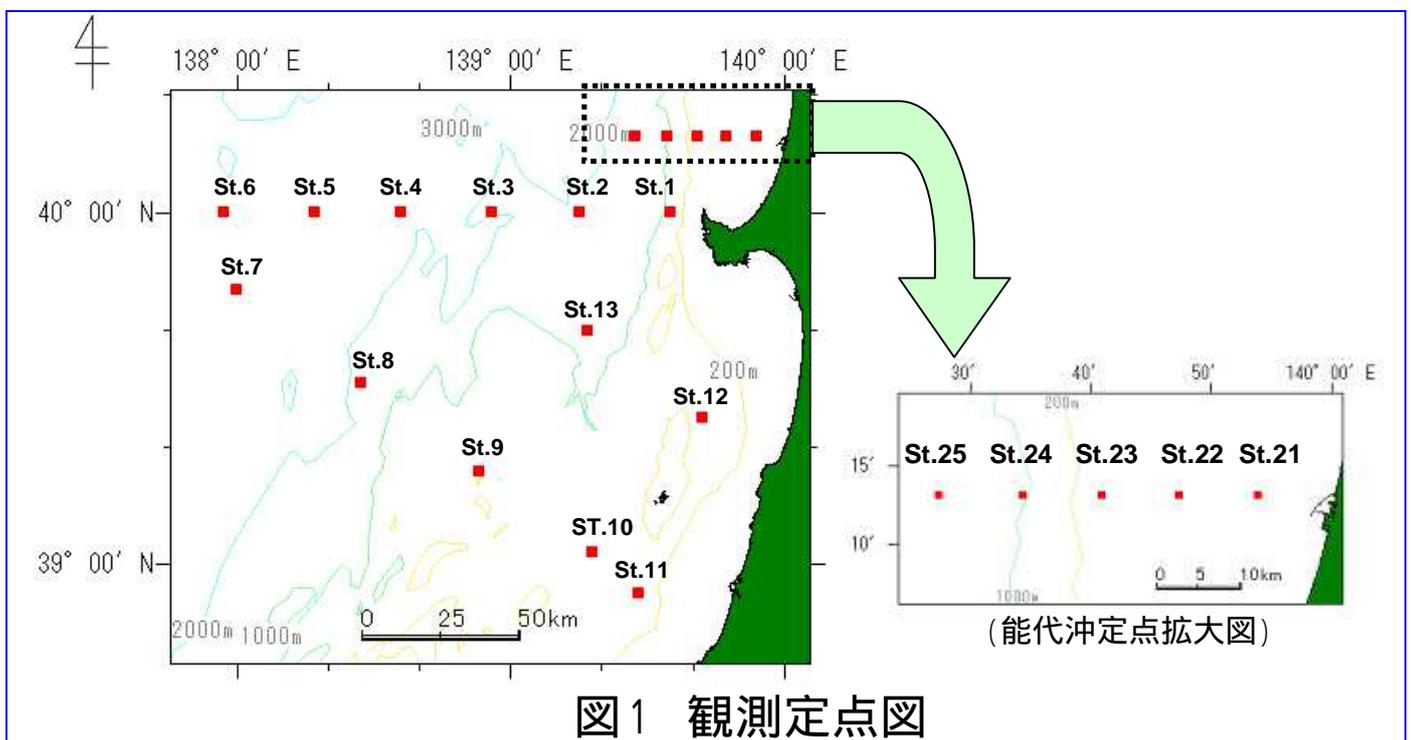
水深200m層(4ページの図5)

水溫は1.4~8.9 の範囲にあり、100m層同様、沖合の1点を除き「平年並み」以上です。

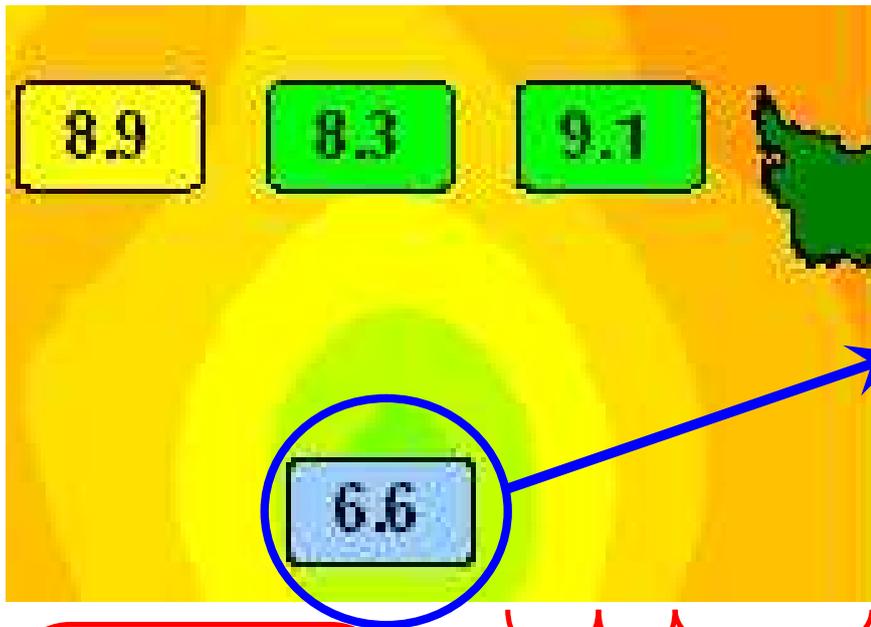
総合的に見て、全層で、沿岸付近は高め、沖合が低めの水溫配置となっています。

また、4月に存在したSt.13付近の水深100~200m層に冷水塊は消滅し、5月はむしろ周囲よりも高めの水溫となっています。

例年に比べて、「やや低め」がSt.7の100m層と200m層に見られるほかは、「平年並み」または「やや高い」が、ほとんどを占めています。



図の見かた



数字は観測した水温 () を、枠内の色は偏差を表します。偏差を表す色の意味は、下の表を参照してください。(この場合、6.6 で、平年に比べてやや低いことを表します。)

注!!

ただし、どの色がどの水温帯を表すかは図によって違います(他の図でも黄色が8.0~8.5とは限りません)。

9~9.5 の水温帯を表します。

8.5~9.0 の水温帯を表します。

8.0~8.5 の水温帯を表します。

表 水温の評価方法(偏差の色の意味)

水温	はなはだ高い	偏差+201以上(20年以上に1回の出現確率)
	かなり高い	偏差+131~+200(約10年に1回の出現確率)
	やや高い	偏差+61~+130(約4年に1回の出現確率)
	平年並み	偏差±60以内(約2年に1回の出現確率)
	やや低い	偏差-61~-130(約4年に1回の出現確率)
	かなり低い	偏差-131~-200(約10年に1回の出現確率)
	はなはだ低い	偏差-201以下(20年以上に1回の出現確率)

$$\text{偏差} = (\text{今月の観測値} - \text{平年値}) / \text{標準偏差} \times 100$$

平年値とは、St.1~13が1971年から2000年まで、St.21~25が1978年から2000年までの平均値です。

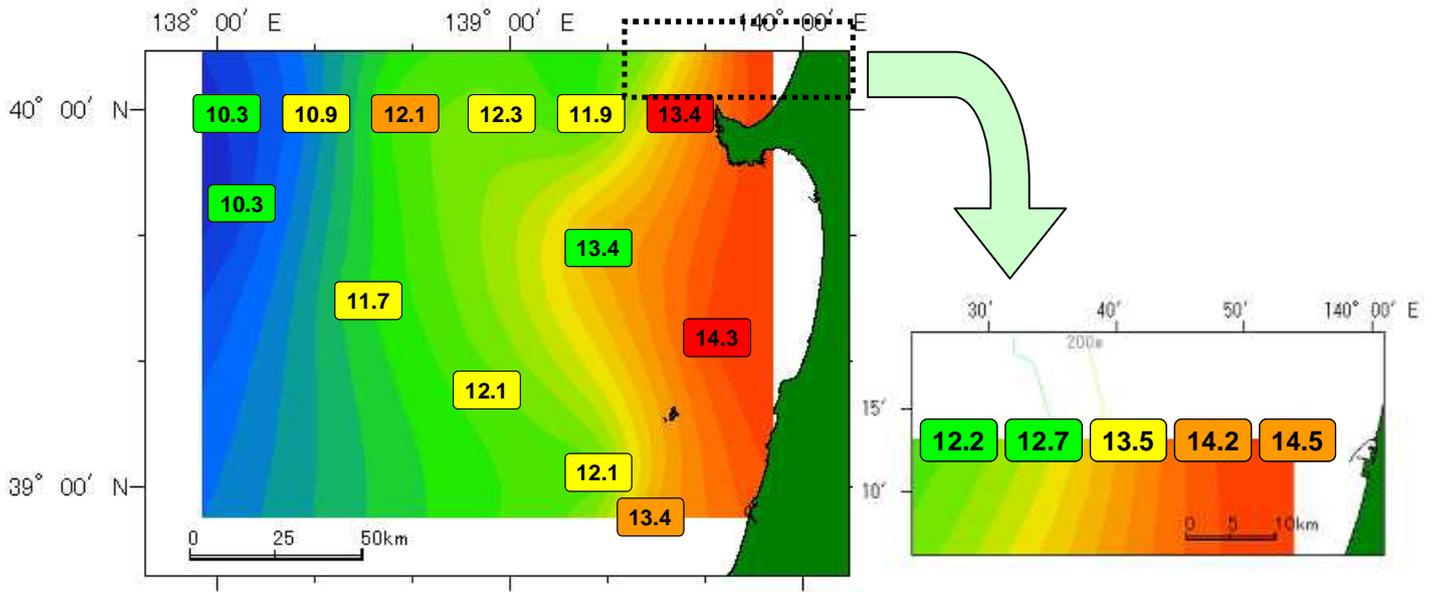


図2 表層の水温分布と定点別評価(偏差)

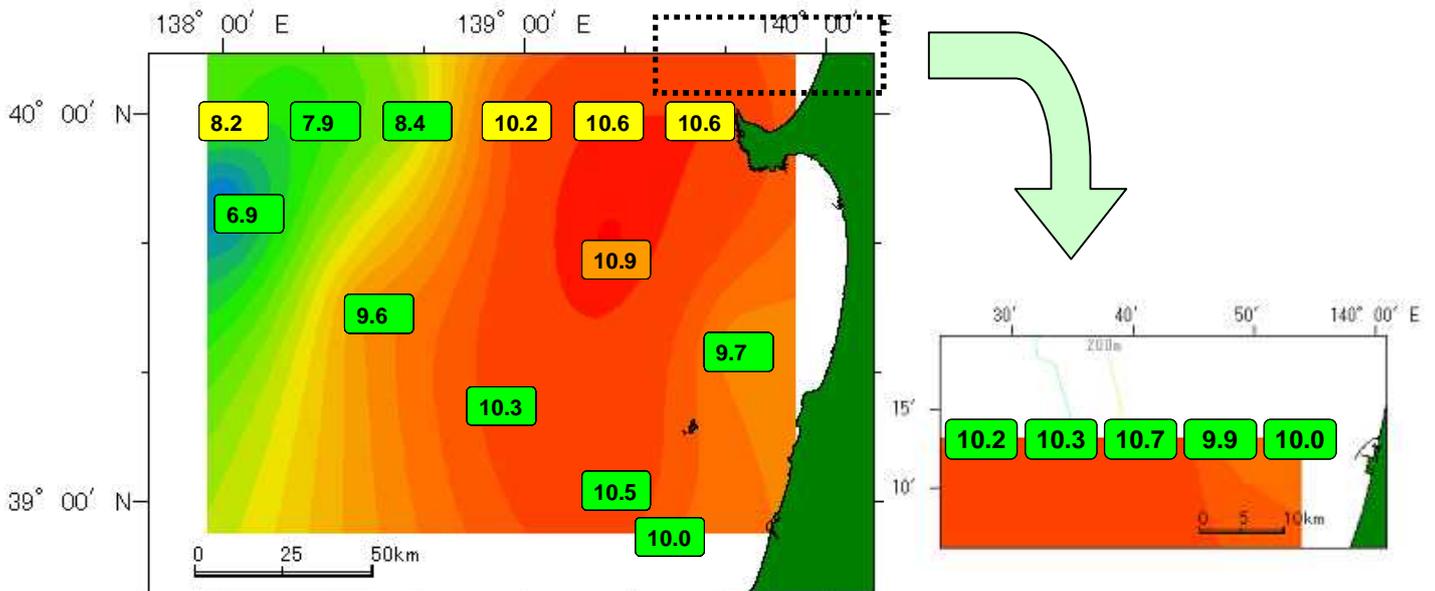


図3 50m層の水温分布と定点別評価(偏差)

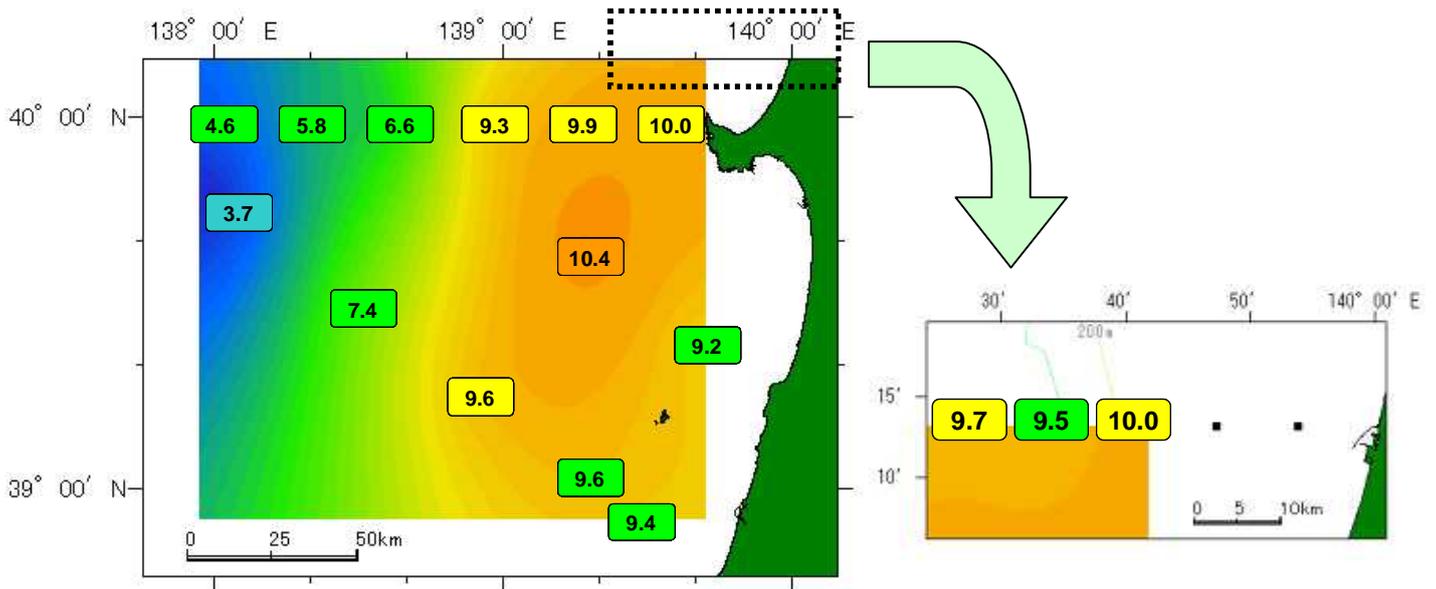


図4 100m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

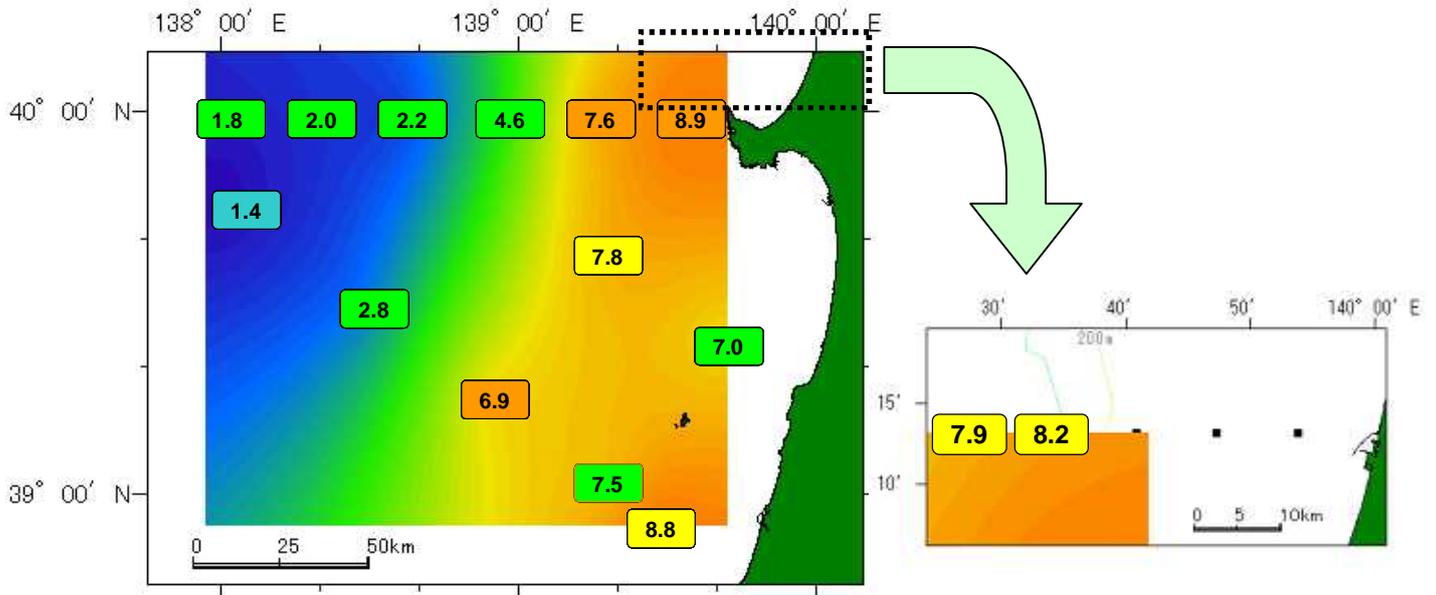


図5 200m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

秋田県沖合域の水温状況 (平成22年6月)

調査船千秋丸と第二千秋丸が6月1日から4日に行った水温観測結果についてお知らせします。

表層(3ページの図2)

水温は15.9~17.6 の範囲にあり、5月に比べて平均で3.5 ほど上がっていますが、能代沖及び沿岸部の昇温幅は小さめでした。すべての点が平年値以下の水温ですが、特に男鹿半島よりも北の沿岸部に冷たい水域があるようです。

水深50m層(3ページの図3)

水温は7.1~11.8 の範囲にあり、ほとんどの点が5月の観測値並か、それ以下でした。平年に比べても、2点を除いて「平年並み」以下でした。

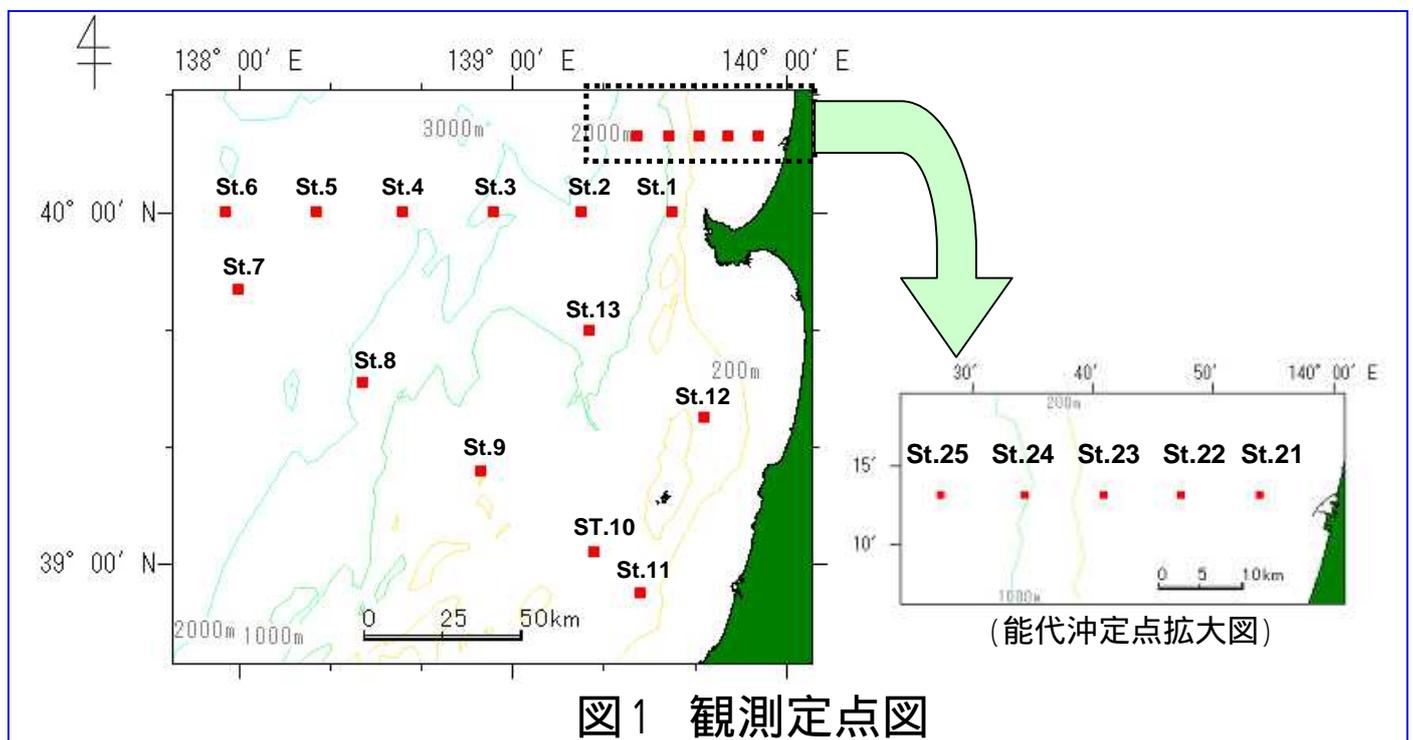
水深100m層(4ページの図4)

水温は3.4~10.1 の範囲で、この層も5月の観測値からほとんど変わっていません。また、すべての点が「平年並み」以下となっています。

水深200m層(4ページの図5)

水温は1.5~8.2 の範囲でした。この層もほとんどの点が5月の観測値を下回っており、St.9とSt.13では4 前後も低下していました。また、やはりすべての点が「平年並み」以下の水温でした。

全体的に見ると、表層を除く各層の水温は、5月からほとんど上がっていない状態でした。また、4月、5月は「平年並み」または「やや高い」という点の割合が高かったのですが、6月は、全層の、ほぼすべての点が「平年並み」以下でした。



図の見かた

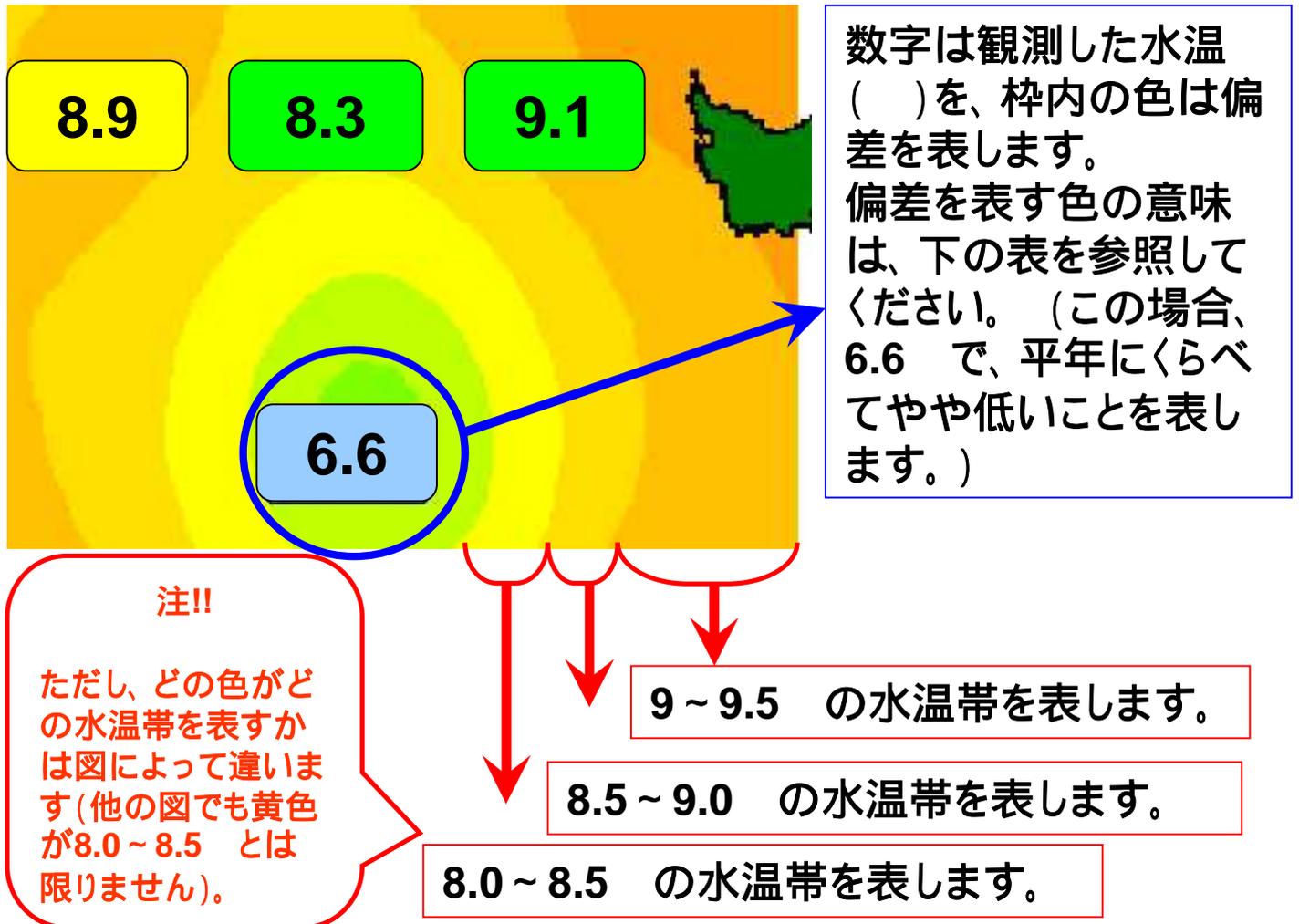


表 水温の評価方法(偏差の色の意味)

水温	はなはだ高い	偏差+201以上(20年以上に1回の出現確率)
	かなり高い	偏差+131~+200(約10年に1回の出現確率)
	やや高い	偏差+61~+130(約4年に1回の出現確率)
	平年並み	偏差±60以内(約2年に1回の出現確率)
	やや低い	偏差-61~-130(約4年に1回の出現確率)
	かなり低い	偏差-131~-200(約10年に1回の出現確率)
	はなはだ低い	偏差-201以下(20年以上に1回の出現確率)

$$\text{偏差} = (\text{今月の観測値} - \text{平年値}) / \text{標準偏差} \times 100$$

平年値とは、St.1~13が1971年から2000年まで、St.21~25が1978年から2000年までの平均値です。

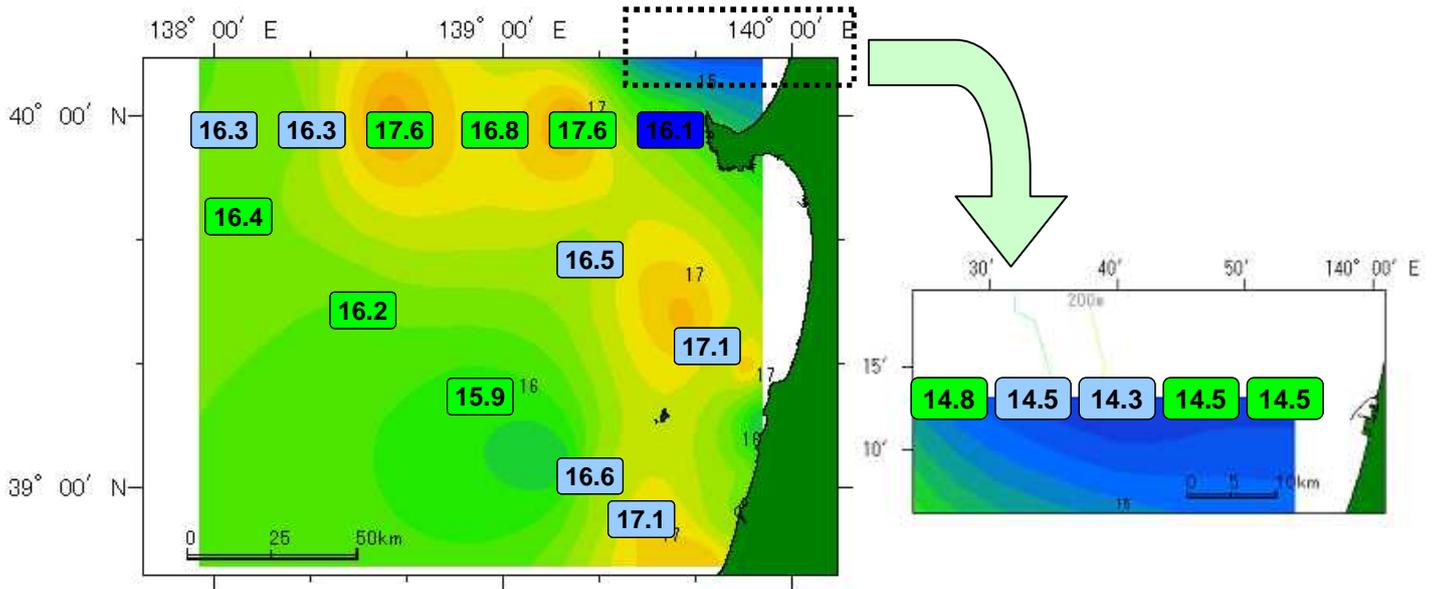


図2 表層の水温分布と定点別評価(偏差)

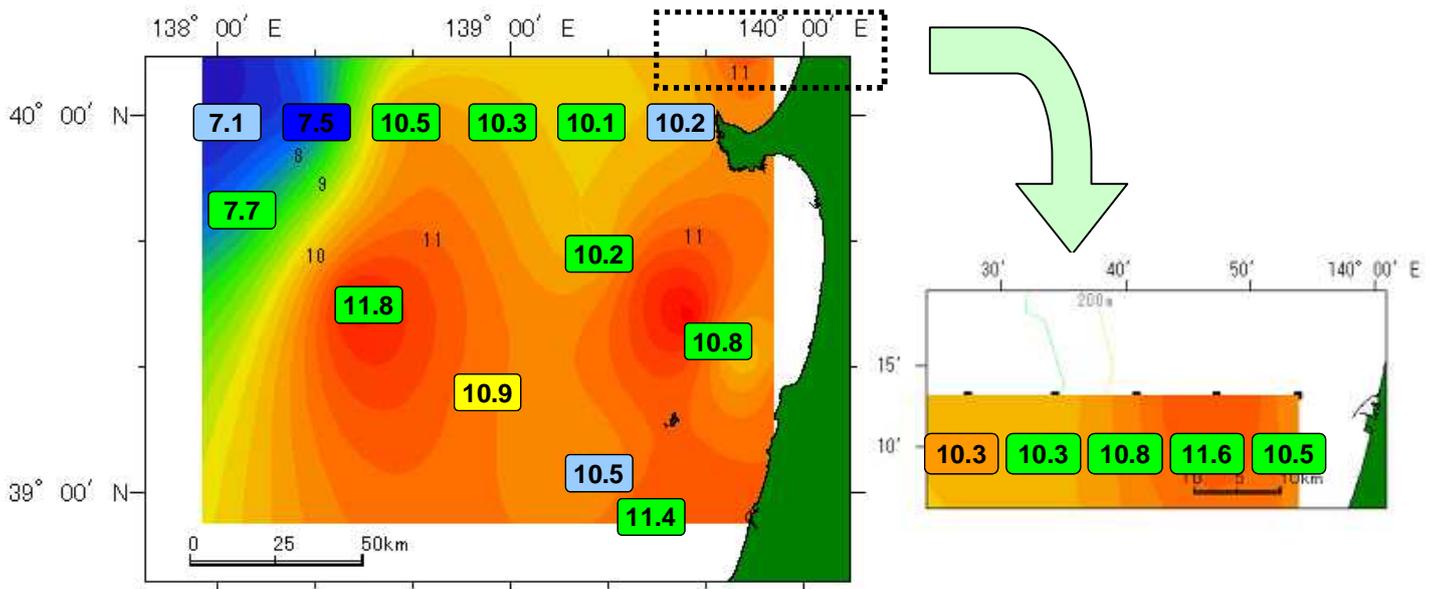


図3 50m層の水温分布と定点別評価(偏差)

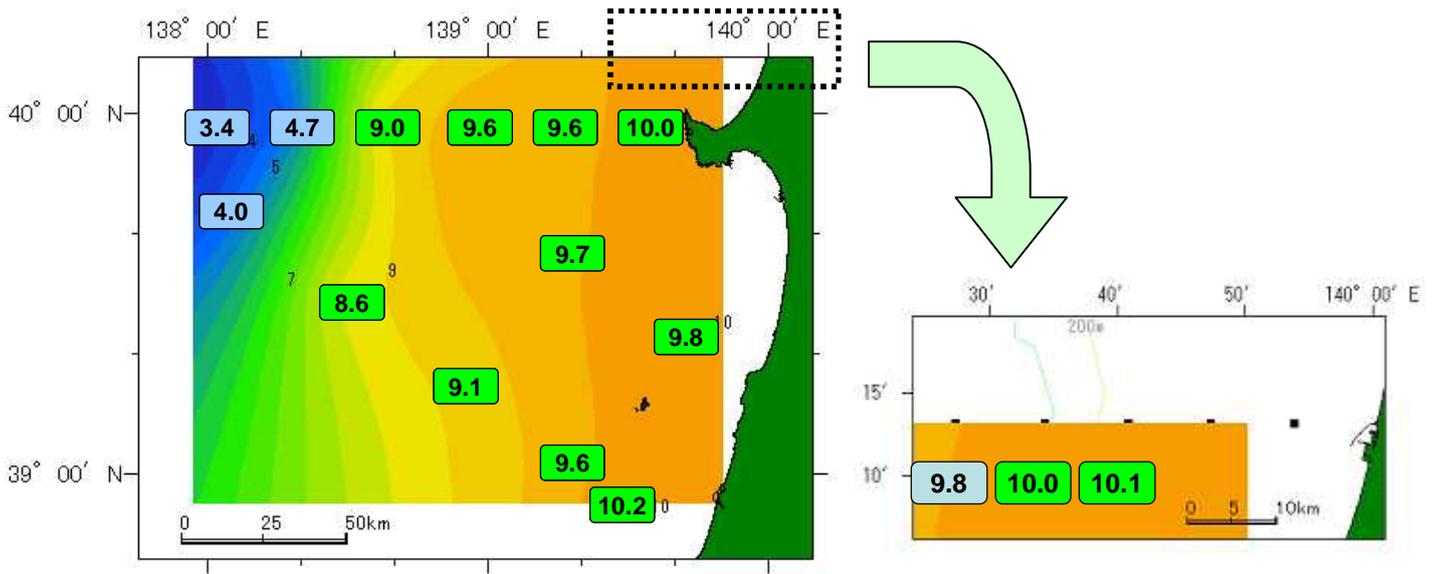


図4 100m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

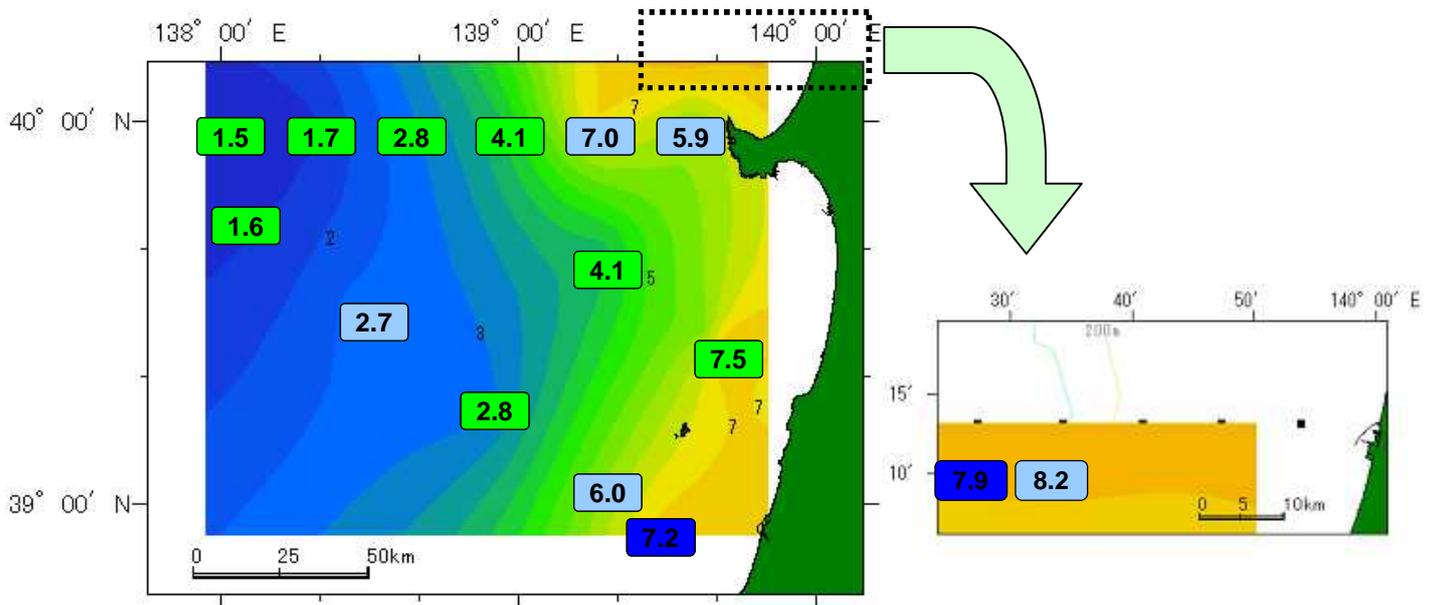


図5 200m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

秋田県沖合域の水温状況 (平成22年9月)

調査船千秋丸と第二千秋丸が9月1日から6日に行った水温観測結果についてお知らせします。

表層(3ページの図2)

水温は28または29 前後で、平年に比べて2.9~4.9 高くなっています。

水深50m層(3ページの図3)

水温は10.0~22.4 の範囲にあり、平年値と比べると、能代沖と沖合は「平年並み」から「やや高め」ですが、東経139度よりも岸沿いでは「やや低い」から「はなはだ低い」状況です。

水深100m層(4ページの図4)

3.5~13.5 の範囲で、全域で「平年並み」以下の水温となっています。能代沖を含めて、多くの定点では「やや低い」か「平年並み」となっていますが、本荘沖及び秋田沖には「はなはだ低い」ところが見られます。

比べて、沿岸は低め、沖合は平年並み程度という状況は、水深50m層と同様です。

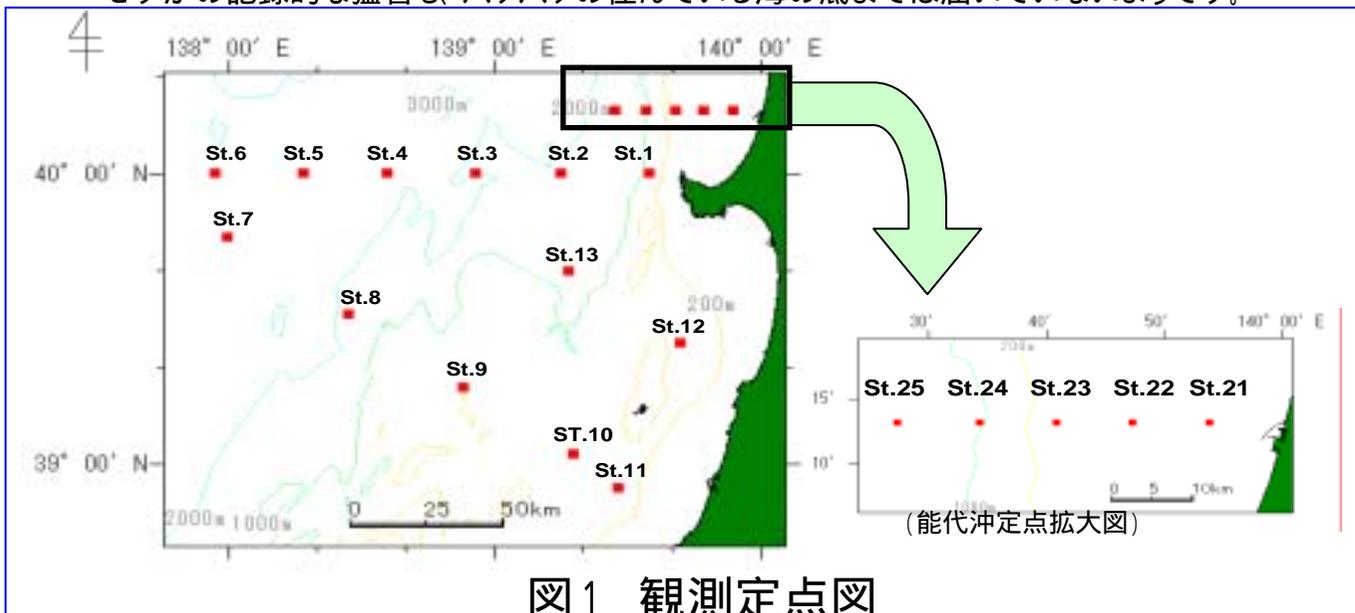
水深200m層(4ページの図5)

水温は1.6~8.8 の範囲で、岸寄りに「やや高い」から「かなり高い」定点が見られますが、沖合は「平年並み」から「やや低い」水温となっています。

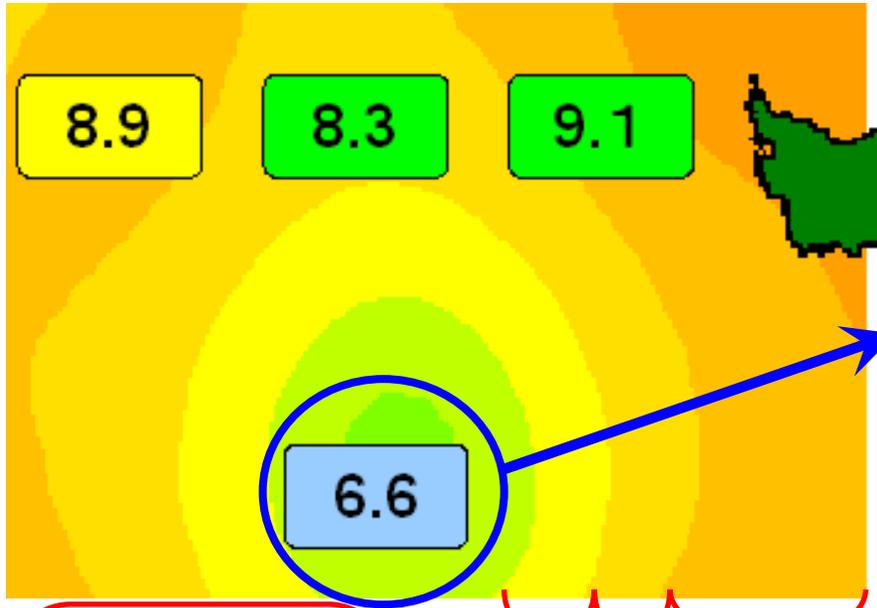
猛暑の影響により海水温も表層付近は全域が「はなはだ高い」状態となっています。8月に戸賀地先で行った観測結果によると表層から少なくとも水深20mまでは同じように水温が高い状況のようです。

しかし、例年形成される入道崎沖の冷水塊が、この夏は比較的接岸している模様で、水深50m以深の岸寄りでは「はなはだ低い」定点も認められ、むしろ平年よりも低めの水温となっています。

さすがの記録的な猛暑も、ハタハタの住んでいる海の底までは届いていないようです。



図の見かた



数字は観測した水温 () を、枠内の色は偏差を表します。偏差を表す色の意味は、下の表を参照してください。(この場合、6.6 で、平年にくらべてやや低いことを表します。)

注!!

ただし、どの色がどの水温帯を表すかは図によって違います(他の図でも黄色が8.0~8.5 とは限りません)。

9 ~ 9.5 の水温帯を表します。

8.5 ~ 9.0 の水温帯を表します。

8.0 ~ 8.5 の水温帯を表します。

表 水温の評価方法(偏差の色の意味)

水温	はなはだ高い	偏差+201以上(20年以上に1回の出現確率)
	かなり高い	偏差+131~+200(約10年に1回の出現確率)
	やや高い	偏差+61~+130(約4年に1回の出現確率)
	平年並み	偏差±60以内(約2年に1回の出現確率)
	やや低い	偏差-61~-130(約4年に1回の出現確率)
	かなり低い	偏差-131~-200(約10年に1回の出現確率)
	はなはだ低い	偏差-201以下(20年以上に1回の出現確率)

$$\text{偏差} = (\text{今月の観測値} - \text{平年値}) / \text{標準偏差} \times 100$$

平年値とは、St.1~13が1971年から2000年まで、St.21~25が1978年から2000年までの平均値です。

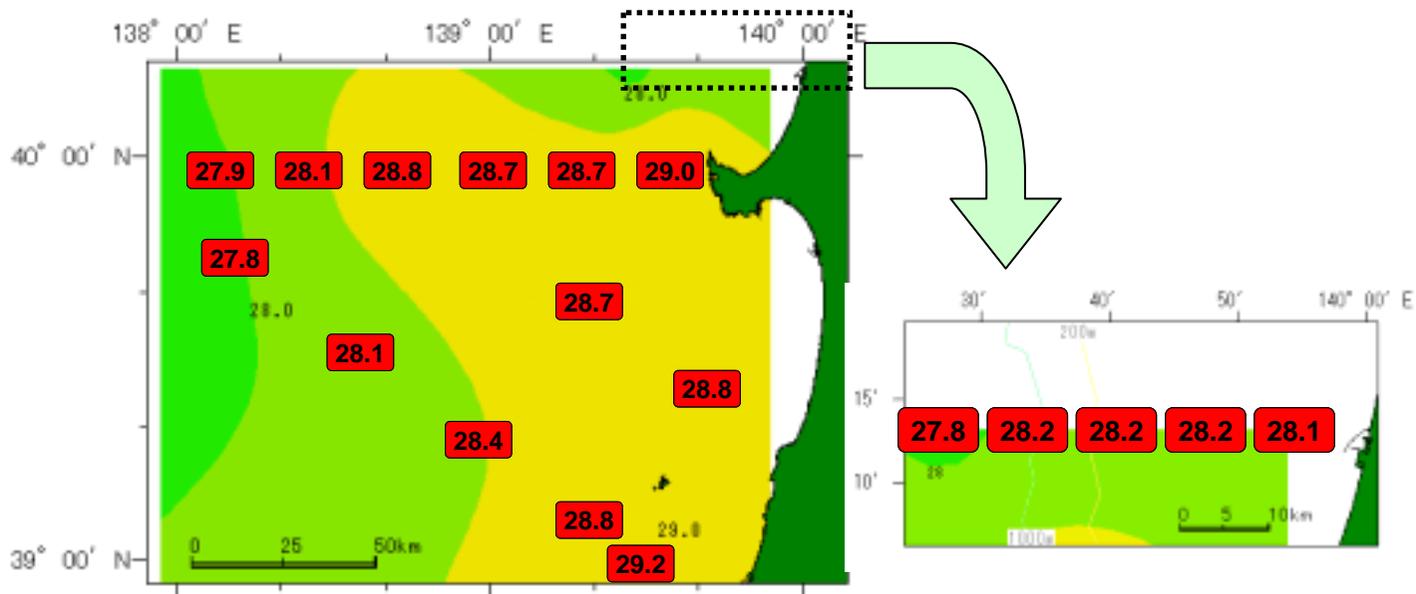


図2 表層の水温分布と定点別評価(偏差)

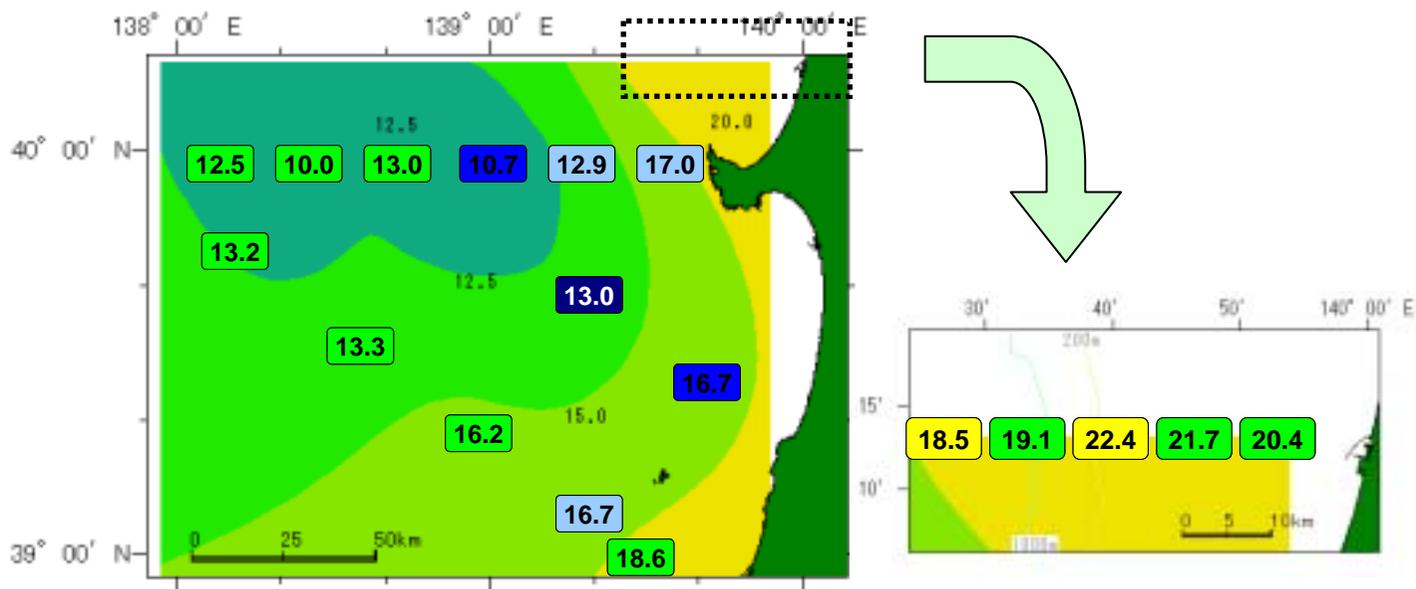


図3 50m層の水温分布と定点別評価(偏差)

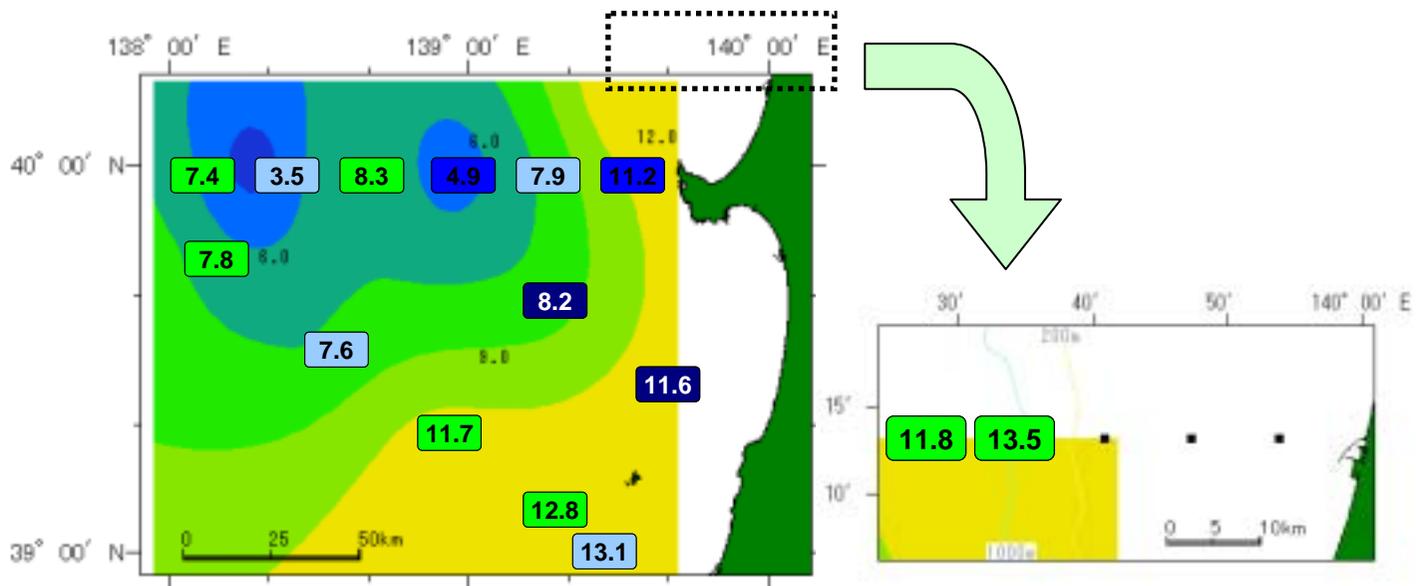


図4 100m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

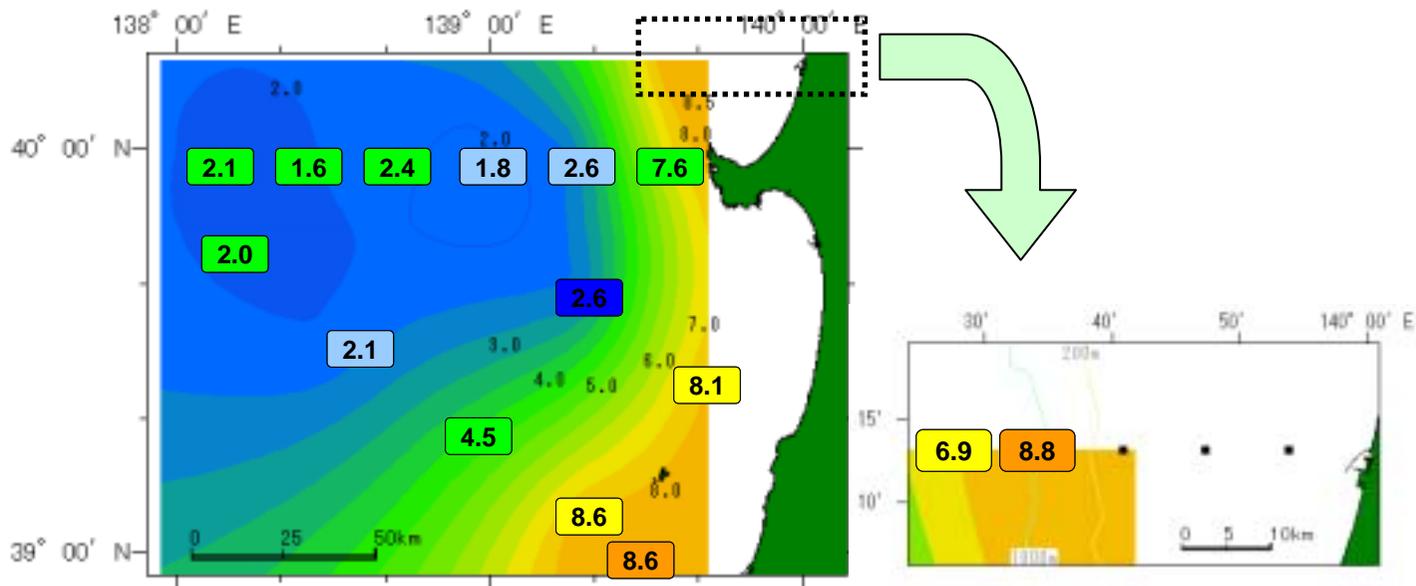


図5 200m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

秋田県沖合域の水温状況 (平成22年10月)

調査船千秋丸が9月30日から1日に行った水温観測結果についてお知らせします。

表層(3ページの図2)

水温は21から25 の範囲で、平年に比べて0.1~2.5 高くなっています。南側の岸付近(St.10~12)に「はなはだ高い」水温が観測されていますが、最も多いのは「平年並み」の定点でした。

水深50m層(3ページの図3)

沖合側の定点(St.4~9)は「平年並み」から「やや高い」または「やや低い」水温となっていますが、県南部の岸寄り(St.10、11)では、表層と同様に「はなはだ高い」水温の場所があります。一方、入道崎沖の岸寄り(St.1、2)では、「はなはだ低い」水温の場所が見られるなど、場所によって大きく状況が変わっているようです。

水深100m層(4ページの図4)

水温は7~14 前後で、「平年並み」か「やや高い」または「やや低い」水温の定点がほとんどを占めています。ただし、入道崎沖の岸寄り(St.1、2)には、50m層と同様に「はなはだ低い」水温の場所が見られます。

水深200m層(4ページの図5)

水温は2~8 前後で、1点(St.11)を除いて、「平年並み」か「やや高い」または「やや低い」水温となっています。しかし、「やや低い」のは入道崎沖の岸寄りの定点(St.1~3)のみで、50m層、100m層と同様の傾向となっています。

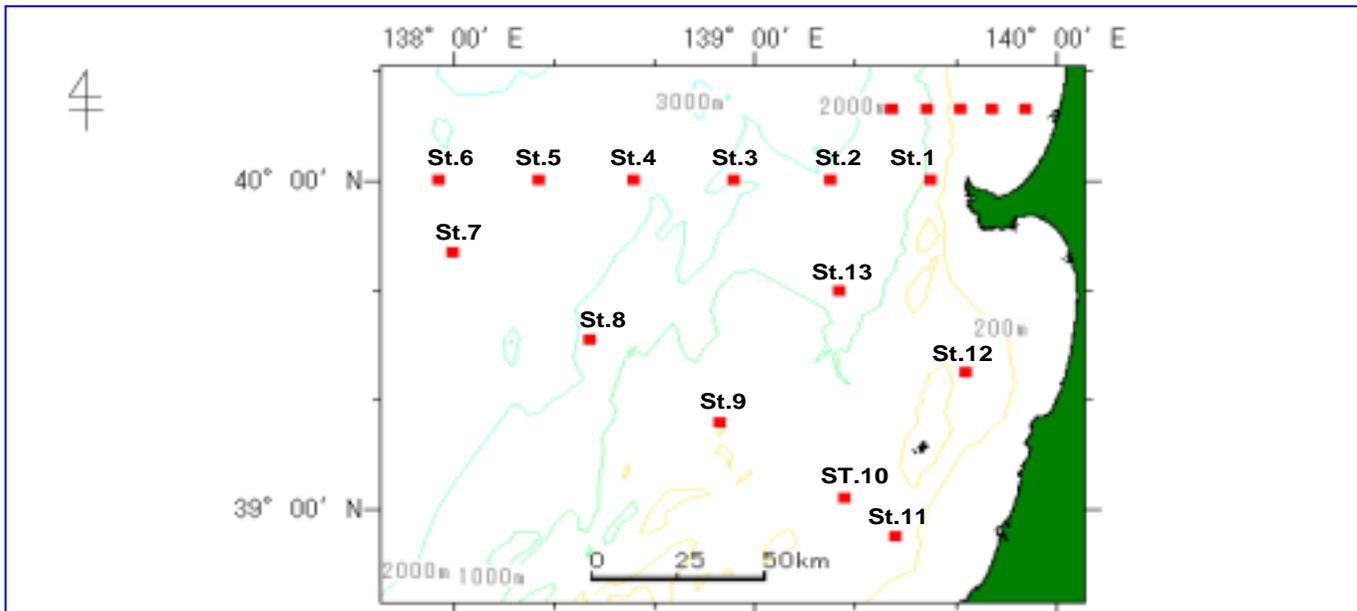
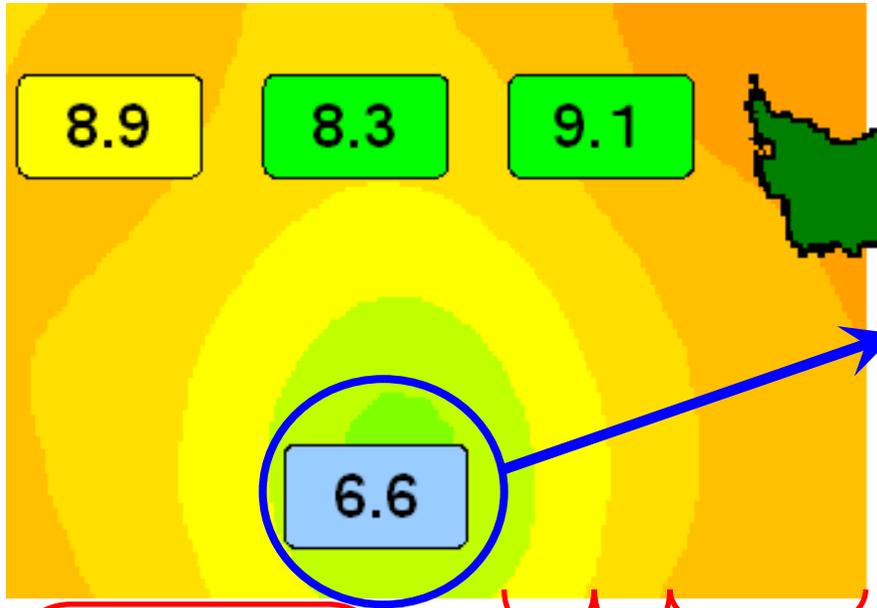


図1 観測定点図

図の見かた



数字は観測した水温 () を、枠内の色は偏差を表します。偏差を表す色の意味は、下の表を参照してください。(この場合、6.6 で、平年に比べてやや低いことを表します。)

注!!

ただし、どの色がどの水温帯を表すかは図によって違います(他の図でも黄色が8.0~8.5 とは限りません)。

9 ~ 9.5 の水温帯を表します。

8.5 ~ 9.0 の水温帯を表します。

8.0 ~ 8.5 の水温帯を表します。

表 水温の評価方法(偏差の色の意味)

水温	はなはだ高い	偏差+201以上(20年以上に1回の出現確率)
	かなり高い	偏差+131~+200(約10年に1回の出現確率)
	やや高い	偏差+61~+130(約4年に1回の出現確率)
	平年並み	偏差±60以内(約2年に1回の出現確率)
	やや低い	偏差-61~-130(約4年に1回の出現確率)
	かなり低い	偏差-131~-200(約10年に1回の出現確率)
	はなはだ低い	偏差-201以下(20年以上に1回の出現確率)

$$\text{偏差} = (\text{今月の観測値} - \text{平年値}) / \text{標準偏差} \times 100$$

平年値とは、St.1~13が1971年から2000年まで、St.21~25が1978年から2000年までの平均値です。

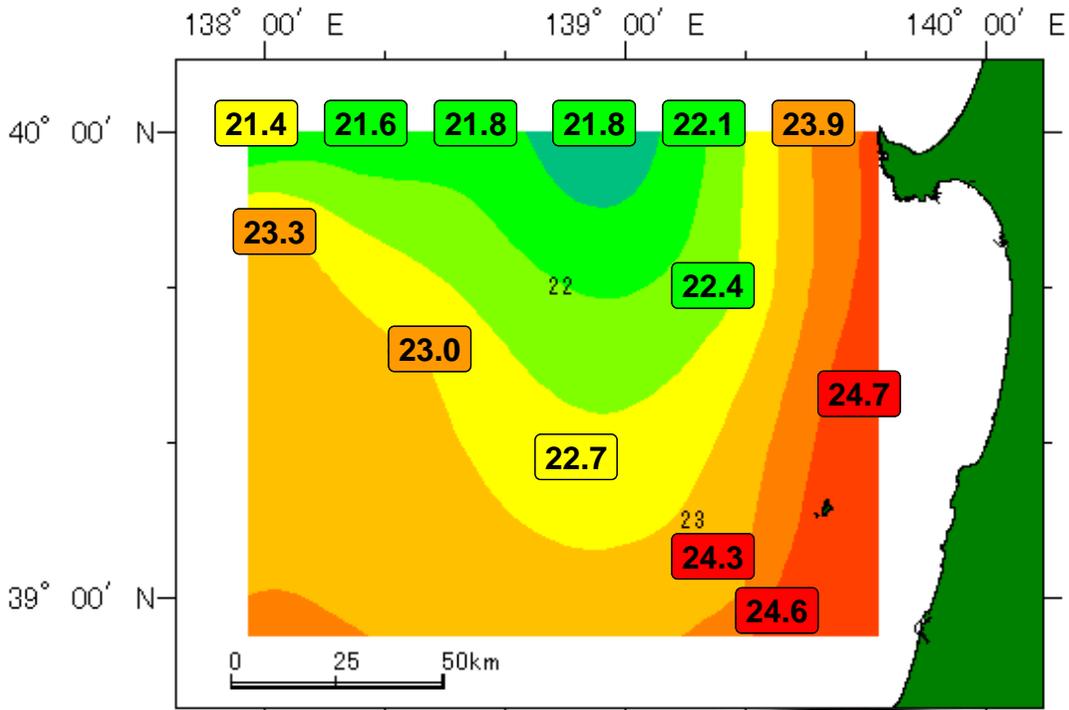


図2 表層の水温分布と定点別評価(偏差)

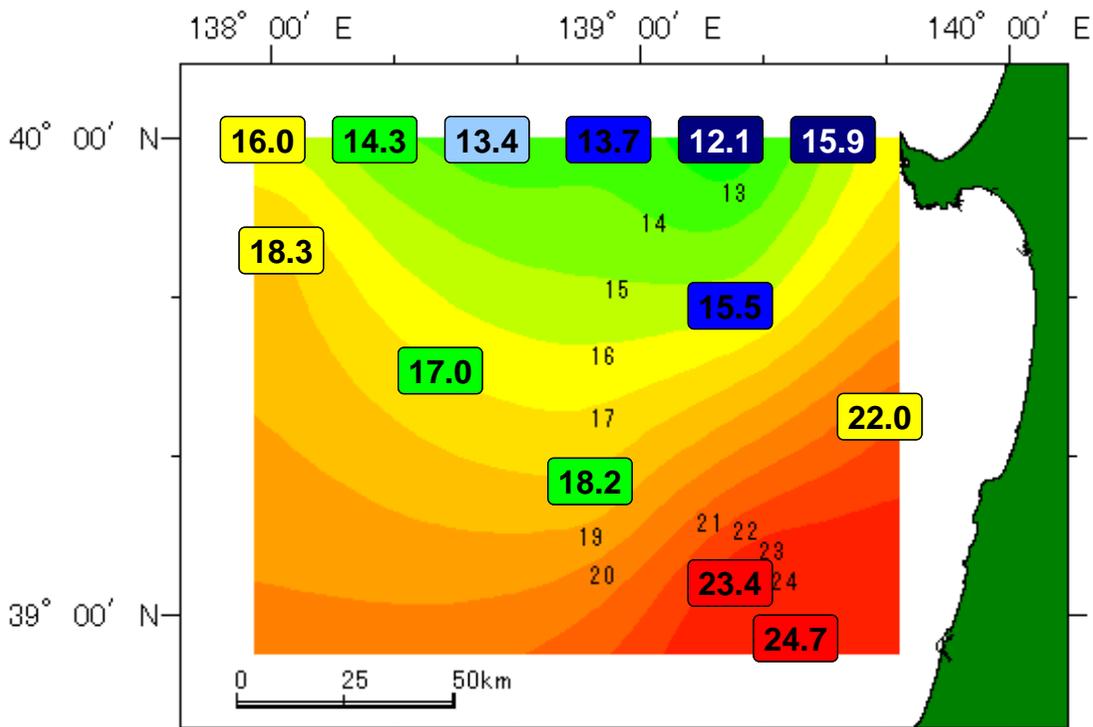


図3 50m層の水温分布と定点別評価(偏差)

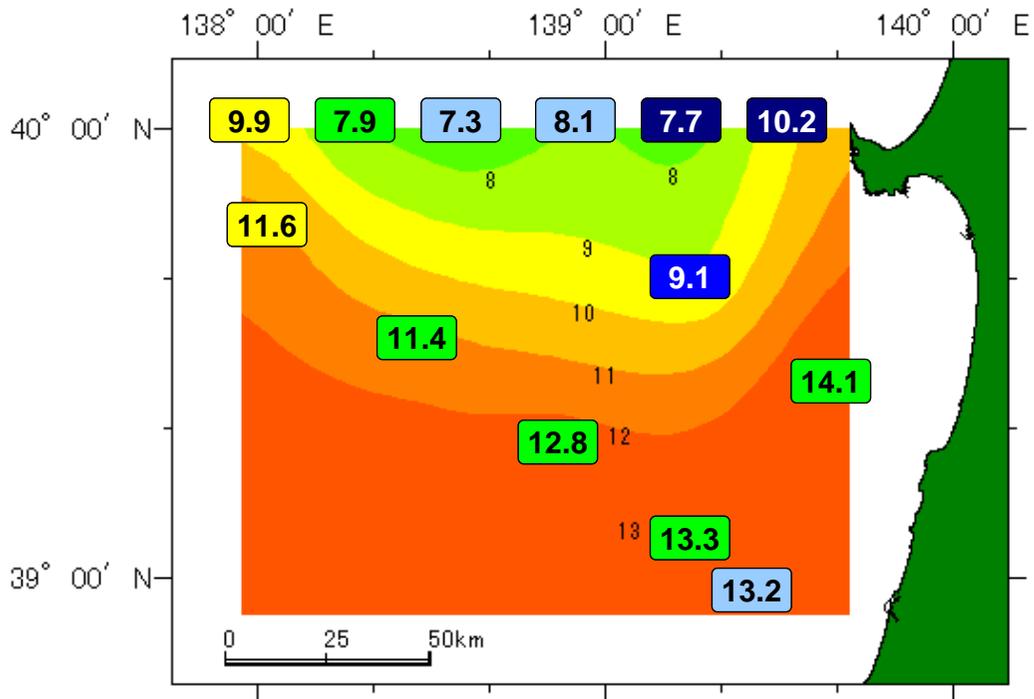


図4 100m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

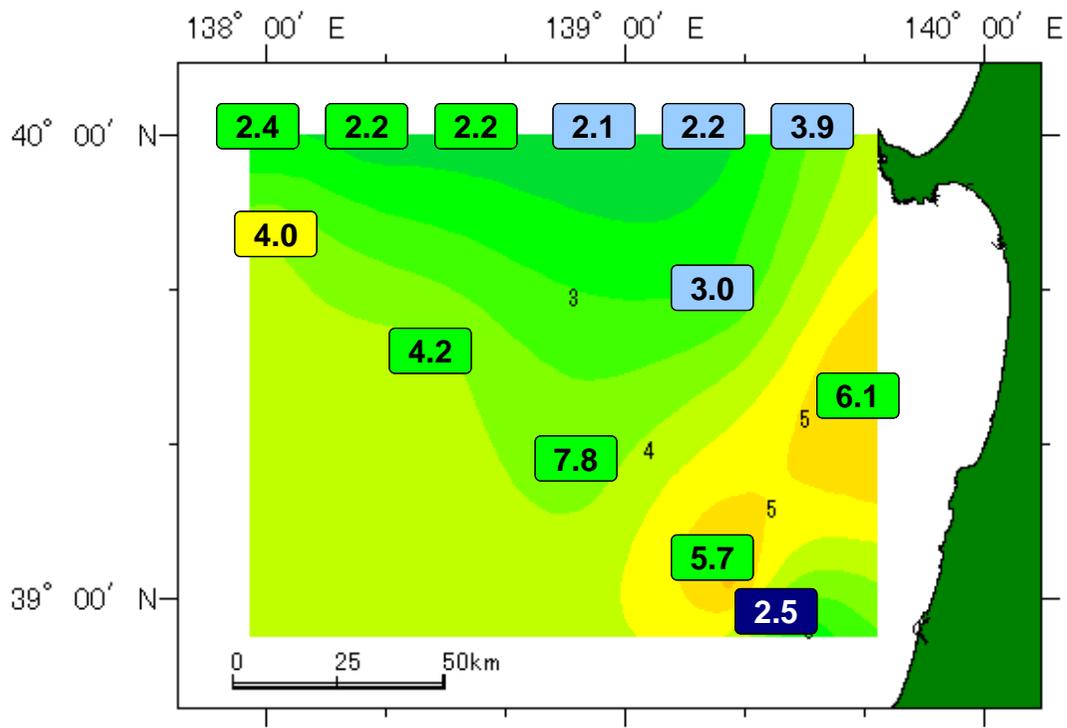


図5 200m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

秋田県沖合域の水溫状況 (平成22年11月)

調査船千秋丸が11月4日から5日に行った水溫観測結果についてお知らせします。

表層(3ページの図2)

水溫は、沖合が14～16℃で、ほとんどの定点が平年に比べて「やや低い」となっています。一方、岸寄りでは、沖合よりも高く17～19℃台となっていますが、ほぼ全定点が「平年並み」の水溫です。

全体的に見ても、St.4が「かなり低い」、St.9が「やや高い」ですが、それ以外の定点は「平年並み」または「やや低い」となっています。

水深50m層(3ページの図3)

0m層と同様に、沖合に比べて岸寄りの水溫が高めとなっていますが、平年と比べると、全体的にはほぼ「平年並み」と考えられます。

水深100m層(4ページの図4)

ほとんどの定点が「平年並み」か、「やや高い」または「やや低い」となっていますが、岸寄りの2定点(St.1及びSt.11)は、平年に比べ「かなり低い」水溫となっています。

水深200m層(4ページの図5)

ほとんどの定点が「平年並み」で、それ以外の定点も「やや低い」となっています。

夏季の高水溫はまだ記憶に新しく、一部のごく沿岸では依然として高めの水溫で推移している模様ですが、観測した海域に関しては、ほぼ全域が平年並みで、水溫の極端に低い所や高い所はなさそうです。

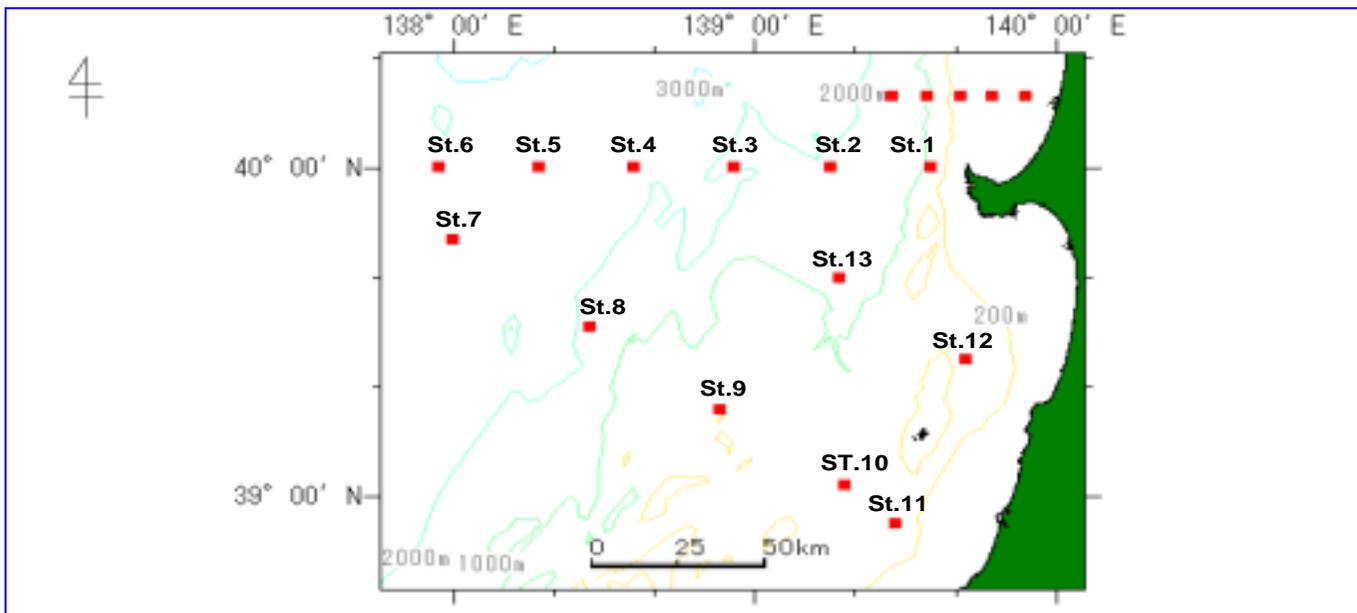
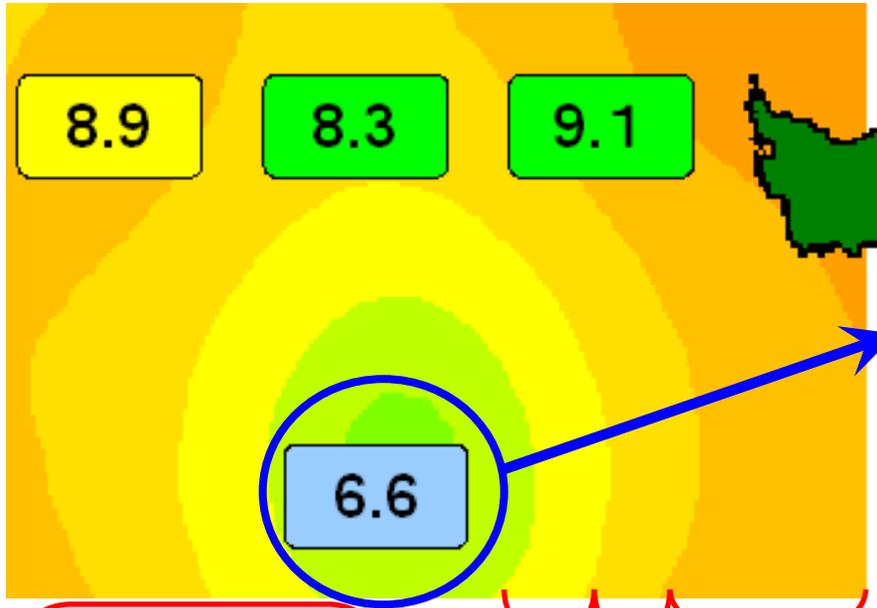


図1 観測定点図

図の見かた



数字は観測した水温 () を、枠内の色は偏差を表します。偏差を表す色の意味は、下の表を参照してください。(この場合、6.6 で、平年に比べてやや低いことを表します。)

注!!

ただし、どの色がどの水温帯を表すかは図によって違います(他の図でも黄色が8.0~8.5 とは限りません)。

9 ~ 9.5 の水温帯を表します。

8.5 ~ 9.0 の水温帯を表します。

8.0 ~ 8.5 の水温帯を表します。

表 水温の評価方法(偏差の色の意味)

水温	はなはだ高い	偏差+201以上(20年以上に1回の出現確率)
	かなり高い	偏差+131~+200(約10年に1回の出現確率)
	やや高い	偏差+61~+130(約4年に1回の出現確率)
	平年並み	偏差±60以内(約2年に1回の出現確率)
	やや低い	偏差-61~-130(約4年に1回の出現確率)
	かなり低い	偏差-131~-200(約10年に1回の出現確率)
	はなはだ低い	偏差-201以下(20年以上に1回の出現確率)

$$\text{偏差} = (\text{今月の観測値} - \text{平年値}) / \text{標準偏差} \times 100$$

平年値とは、St.1~13が1971年から2000年まで、St.21~25が1978年から2000年までの平均値です。

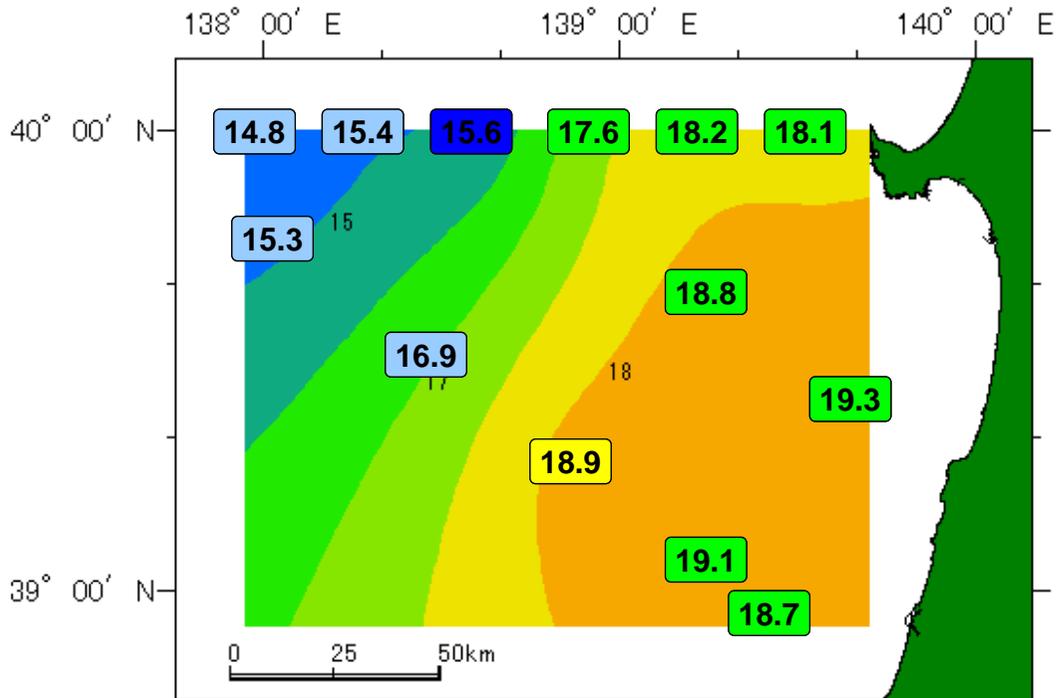


図2 表層の水温分布と定点別評価(偏差)

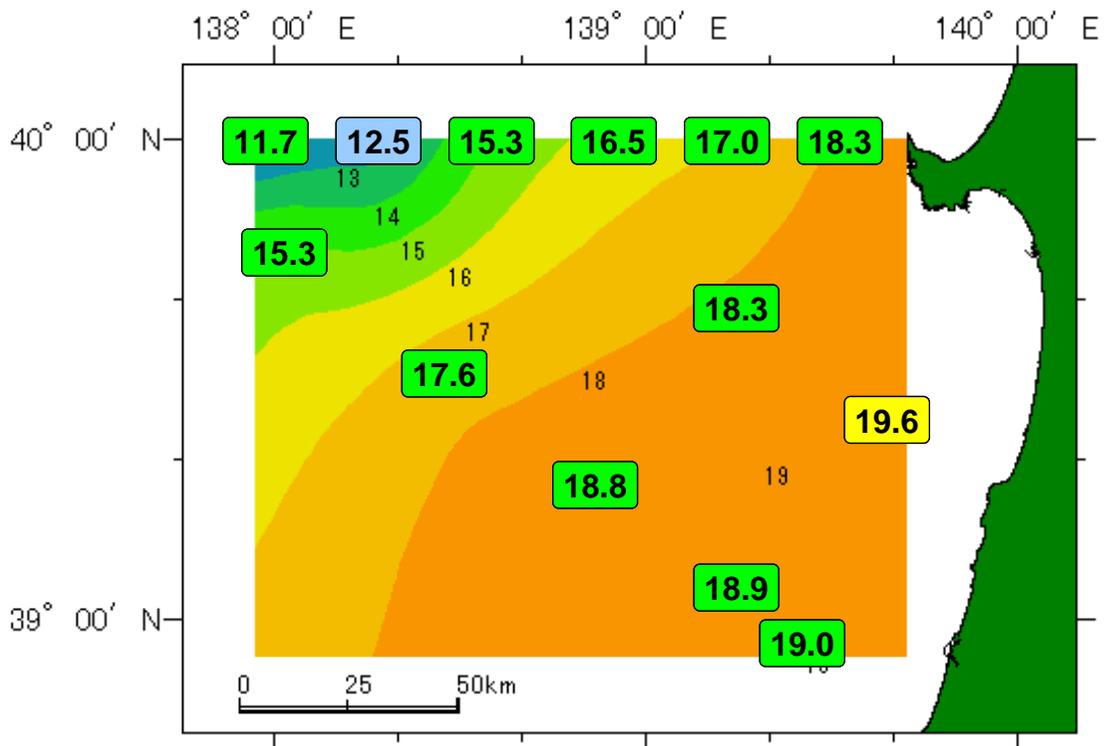


図3 50m層の水温分布と定点別評価(偏差)

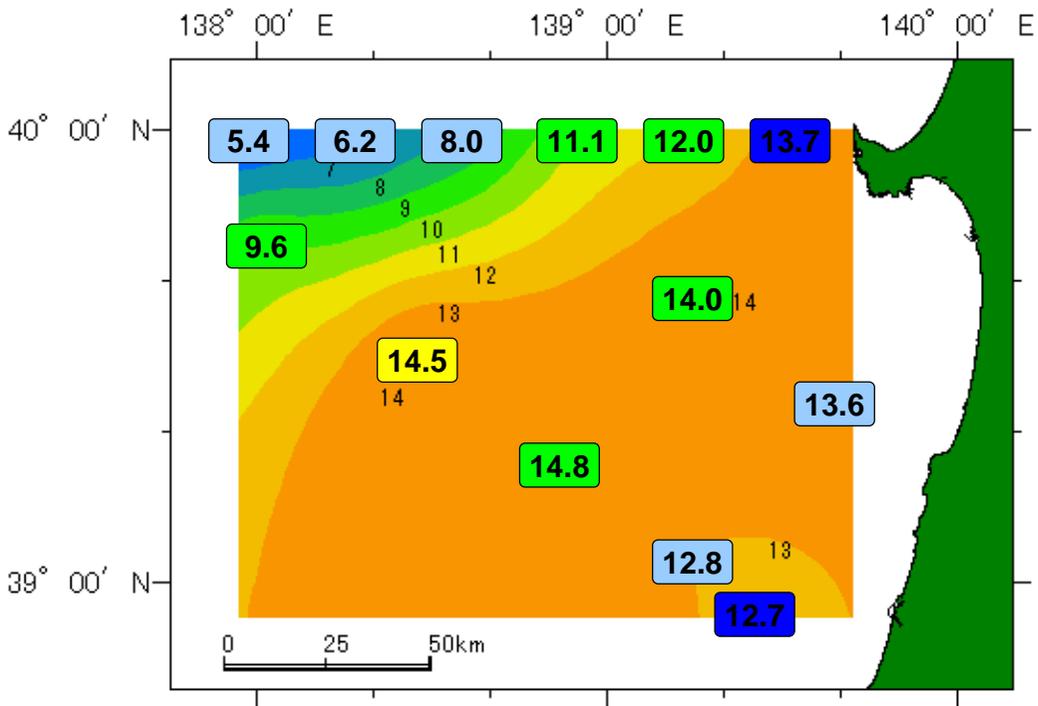


図4 100m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

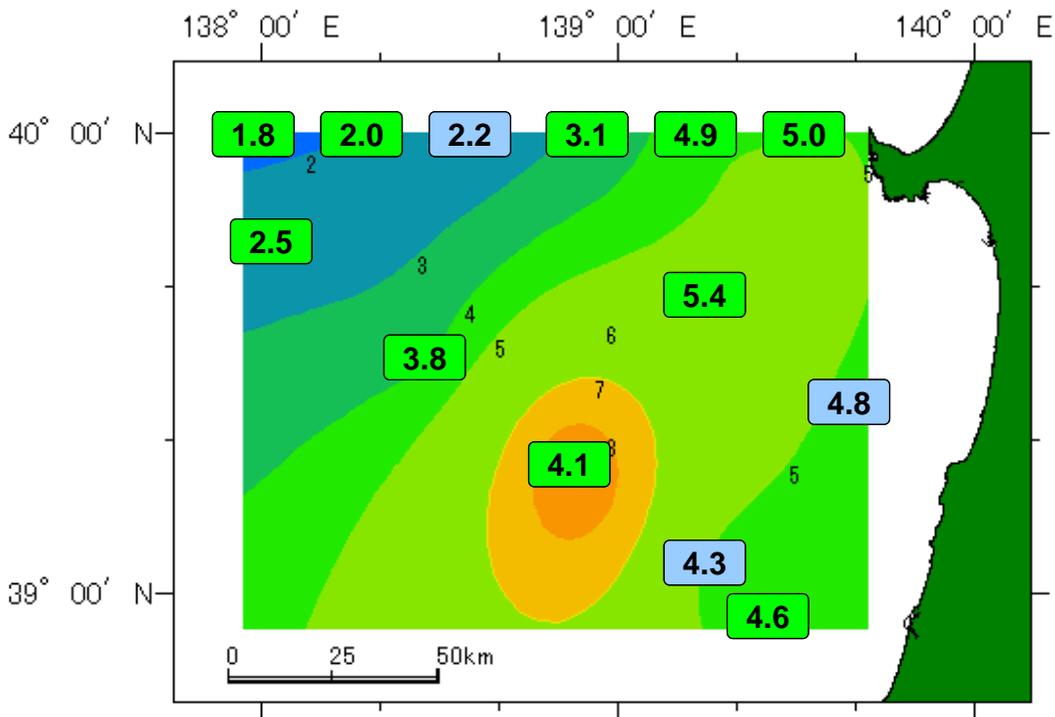


図5 200m層の水溫分布と定点別評価(偏差)

秋田県沖合域の水温状況 (平成23年3月)

調査船千秋丸が3月7～8日と第二千秋丸が2月23日に行った水温観測結果についてお知らせします。

表層(3ページの図2)

水温は7.8～9.6、St.12の「はなはだ低い」と、St.11とSt.13の「やや低い」以外は、「平年並み」または「やや高い」水温でした。ただし、能代沖では「平年並み」か「やや低い」水温でした。

水深50m層(3ページの図3)

表層と同様にSt.12が7.5で「はなはだ低い」となりましたが、それ以外の定点は、能代沖も含めて「平年並み」か「やや高い」でした。

水深100m層(4ページの図4)

St.12が「はなはだ低い」で、それ以外の定点は、50m層と同様に岸寄りが「平年並み」、沖側が「やや高い」または「かなり高い」水温でした。一方、能代沖は「平年並み」か「やや低い」でした。

水深200m層(4ページの図5)

やはりSt.12が「はなはだ低い」でしたが、St.3付近には「はなはだ高い」または「かなり高い」水温帯が確認されました。St.6付近の水温は2台と他の定点に比べて低くなっていますが、これは例年見られる状況です。

全層の各点で、2月の観測時に比べて1程度下がっていました。2月に100～200m水深帯に認められた高水温域は、やや岸側に移っていました。なお、St.12でも観測された、例年に比べて水温の低い海域は、本県沖から新潟県付近にまで広がっている模様です。

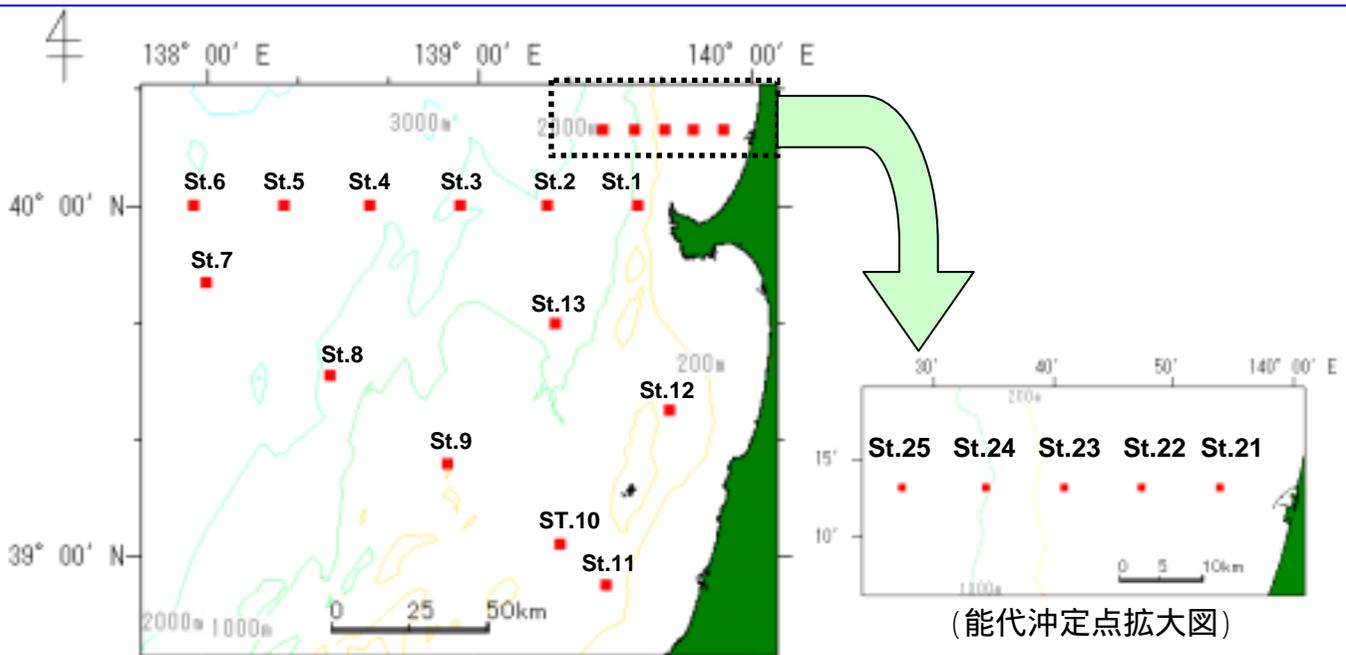
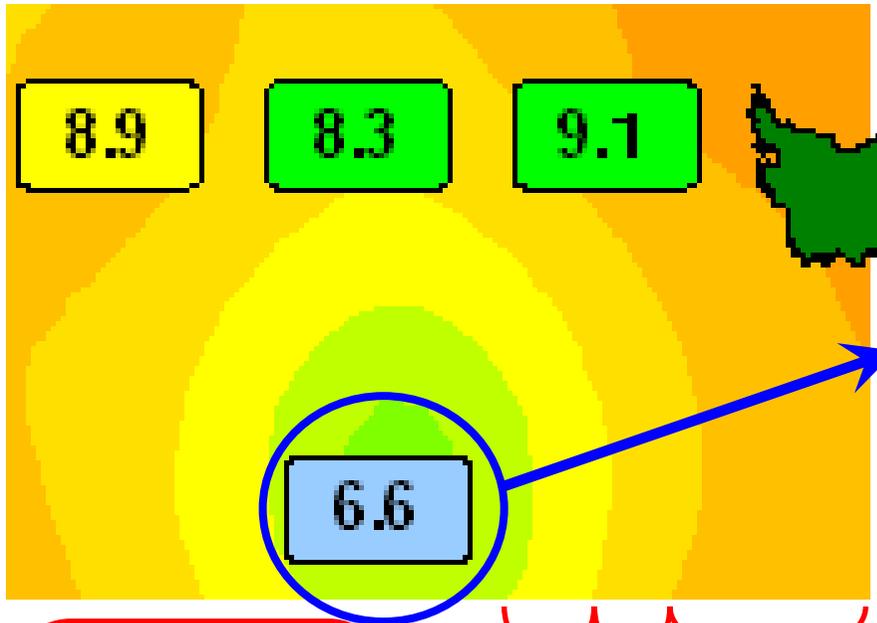


図1 観測定点図

図の見かた



数字は観測した水温 () を、枠内の色は偏差を表します。偏差を表す色の意味は、下の表を参照してください。(この場合、6.6 で、平年に比べてやや低いことを表します。)

注!!

ただし、どの色がどの水温帯を表すかは図によって違います(他の図でも黄色が8.0~8.5 とは限りません)。

9 ~ 9.5 の水温帯を表します。

8.5 ~ 9.0 の水温帯を表します。

8.0 ~ 8.5 の水温帯を表します。

表 水温の評価方法(偏差の色の意味)

水温	はなはだ高い	偏差+201以上(20年以上に1回の出現確率)
	かなり高い	偏差+131 ~ +200(約10年に1回の出現確率)
	やや高い	偏差+61 ~ +130(約4年に1回の出現確率)
	平年並み	偏差 ± 60以内(約2年に1回の出現確率)
	やや低い	偏差-61 ~ -130(約4年に1回の出現確率)
	かなり低い	偏差-131 ~ -200(約10年に1回の出現確率)
	はなはだ低い	偏差-201以下(20年以上に1回の出現確率)

$$\text{偏差} = (\text{今月の観測値} - \text{平年値}) / \text{標準偏差} \times 100$$

平年値とは、St.1 ~ 13が1971年から2000年まで、St.21 ~ 25が1978年から2000年までの平均値です。

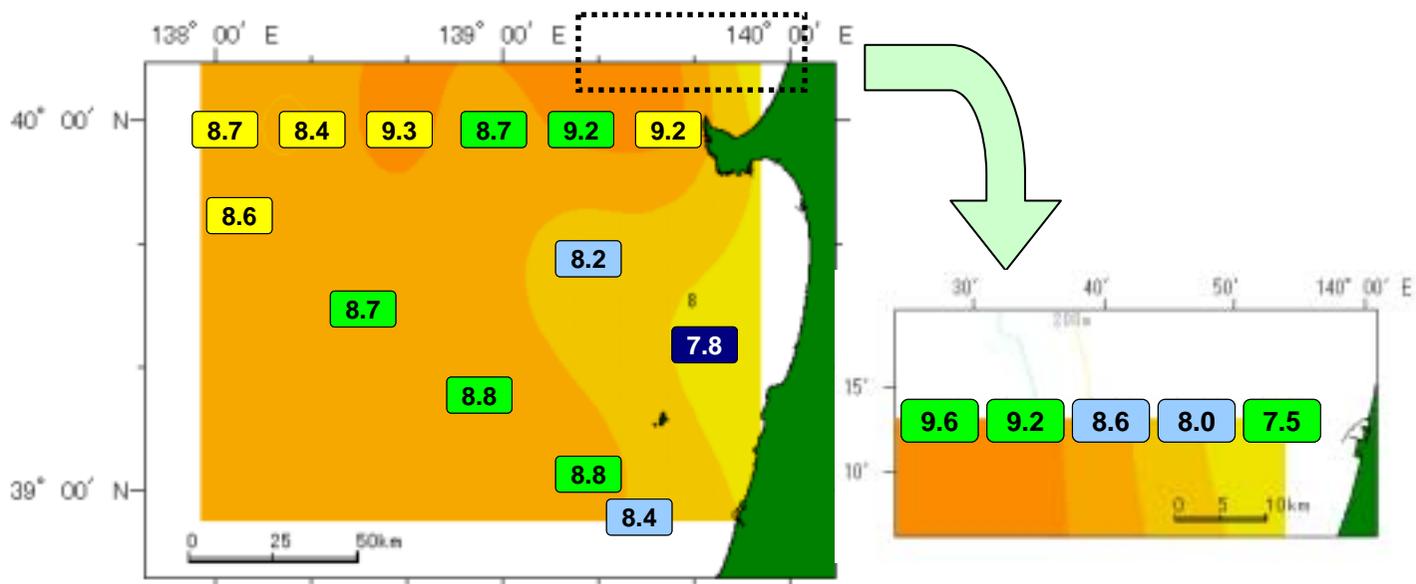


図2 表層の水温分布と定点別評価(偏差)

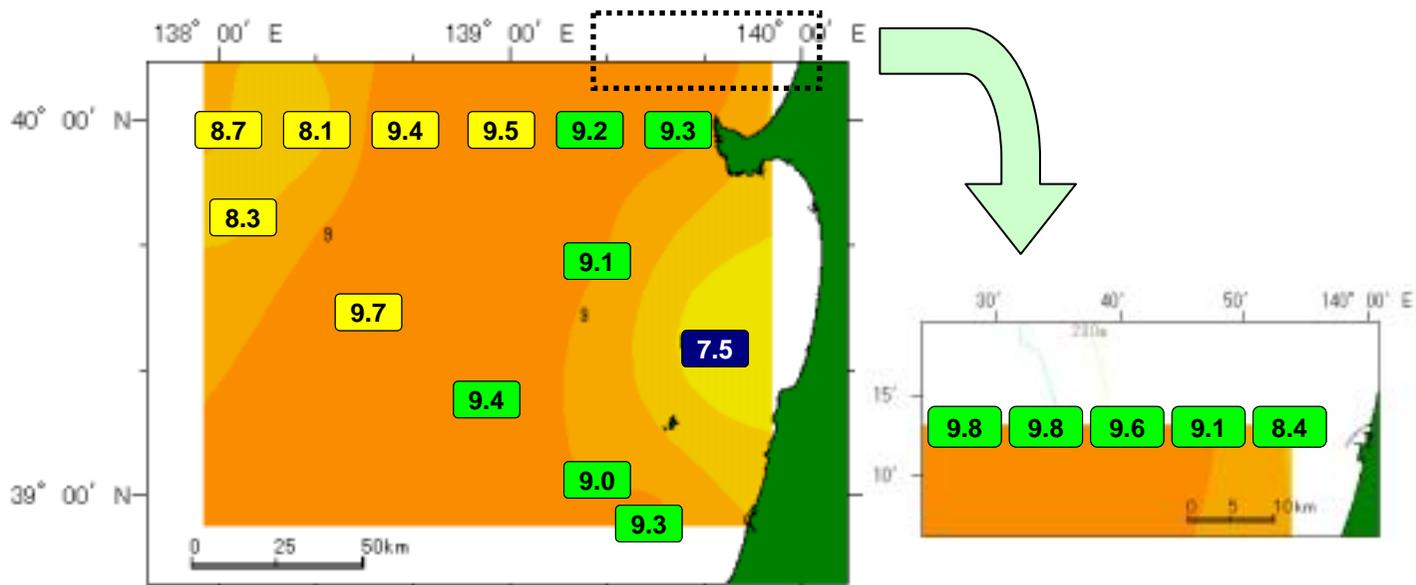


図3 50m層の水温分布と定点別評価(偏差)

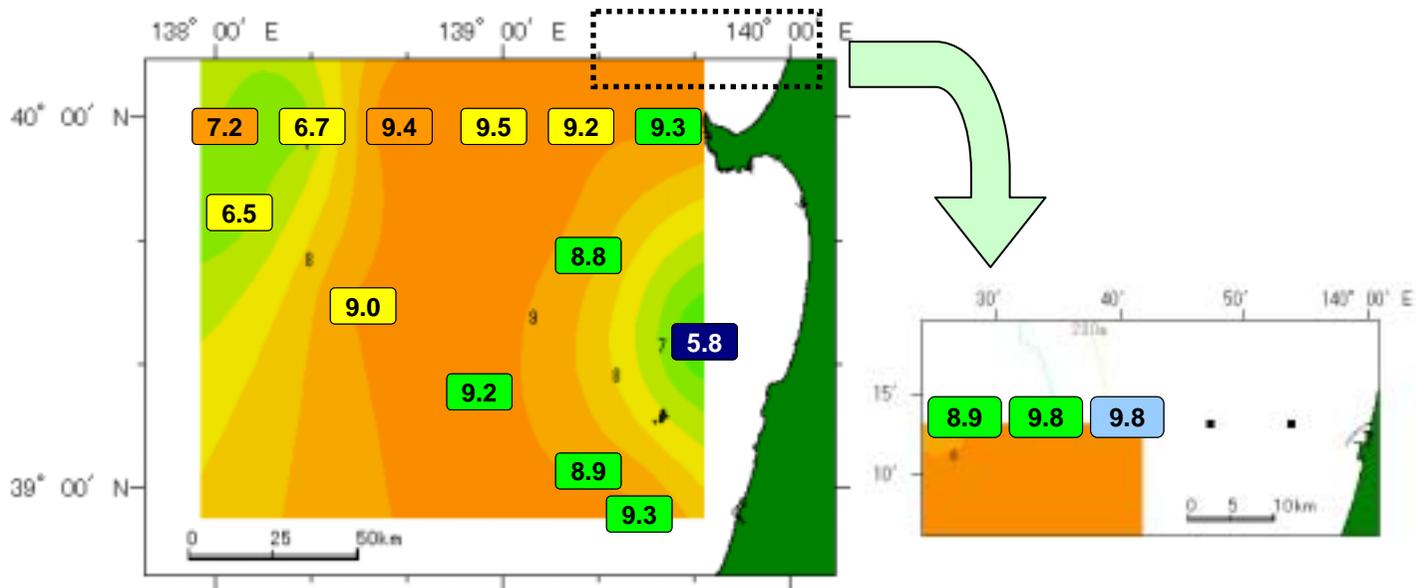


図4 100m層の水温分布と定点別評価(偏差)

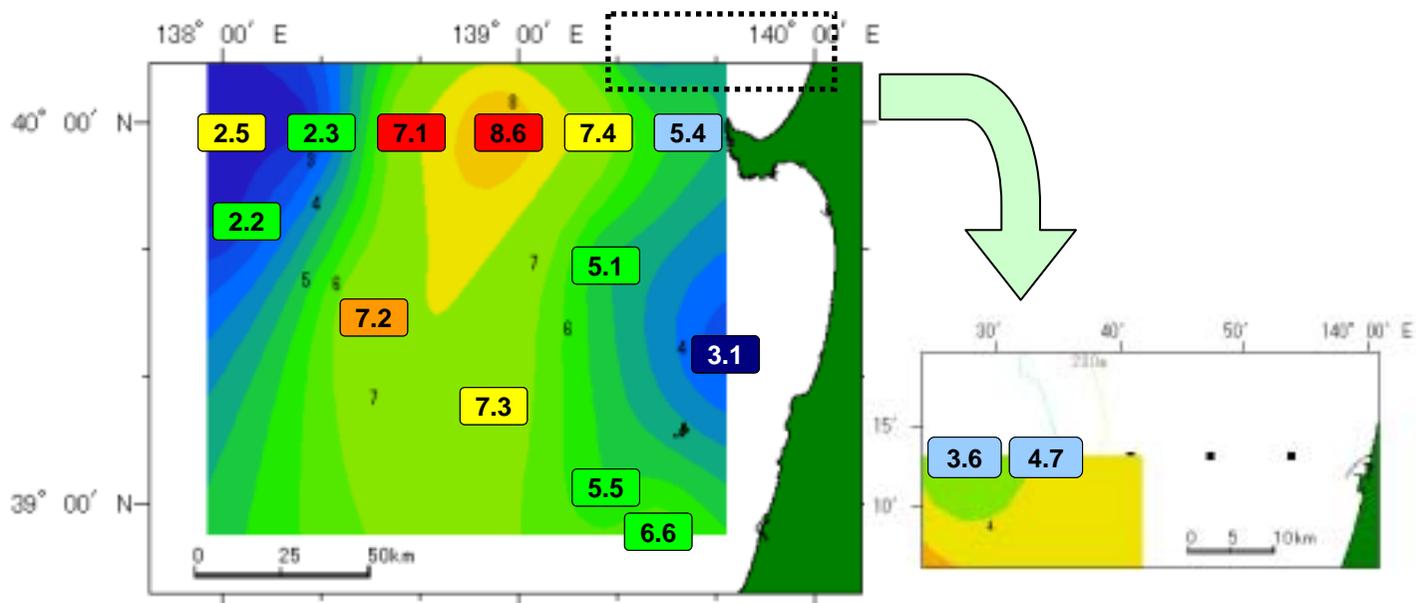


図5 200m層の水温分布と定点別評価(偏差)